

南関東・甲信障害者アートサポートセンター  
2022年度事業報告書

# ART SUPPORT CENTER

南関東・甲信  
障害者アートサポートセンター  
2022年度事業報告書

厚生労働省 令和4年度障害者芸術文化活動普及支援事業



# ART SUPPORT CENTER

南関東・甲信

障害者アートサポートセンター  
2022年度事業報告書

厚生労働省 令和4年度障害者芸術文化活動普及支援事業



# Contents

はじめに ..... 03  
障害者芸術文化活動普及支援事業 南関東・甲信ブロック ..... 04

**Part 1 合同企画展** ..... 07  
齋藤飛鳥／笠原愁平／尾澤佑貴／小幡海知生／小林一緒／  
小牧美穂／コバヤシカオル／金澤一摩／高橋朋之／  
等々力モニカ／榎本吉隆／山本実／桑原詠子／小坂真一／  
岡本智美／OUTBACK アクターズスクール

**Part 2 研修** ..... 25  
1. 支援センターによる中間支援の取り組みを学ぶ  
講師：柴崎由美子／樋口龍二 ..... 26  
2. ソーシャルデザインによる支援の仕組みづくりを学ぶ  
講師：福島 治 ..... 30  
3. 舞台芸術や文化施設の鑑賞支援を学ぶ  
講師：藤原顕太 ..... 32

**Part 3 意見交換会** ..... 35  
1. 各自治体が福祉と芸術の状況と事例を紹介しました ..... 36  
2. 支援センターにおける相談支援の現状を聞きました ..... 38  
3. 合同企画展についてブロック会議で話し合いました ..... 40  
4. 合同企画展について振り返りました ..... 42

**Part 4 事業評価** ..... 43  
評価体制／評価方法 ..... 44  
評価のためのアンケート ..... 45  
2022年度のロジックモデル（目標）と達成度 ..... 46  
評価チームによるコメント 長津結一郎／藤原顕太 ..... 48

おわりに ..... 50  
南関東・甲信ブロック 支援センター一覧 ..... 51

## はじめに

2021年度より社会福祉法人みぬま福祉会が南関東・甲信ブロックの広域センターに採択されました。当センターでは、これまでブロック内で培われてきたネットワークの土壌を活かし、それぞれの知見や強みが発揮され、弱い部分はお互いに補うことができる「みんなで考える」ネットワークづくりを目指しました。さらにブロック内の各センターが力をつけていくために、各センターと協働して会議内での事例発表、研修や意見交換などの学び合いに加えて合同企画展を開催し、ウェブサイトなどでの情報発信や対話型の事業評価にも取り組みました。

各センターは地域の状況を把握し、実施団体の専門性やネットワークを活かしながら活動を深めています。昨年度は事業を通じて活動のための知識やノウハウを知るだけでなく、各センターの取り組みの視点や考え方も共有することができ、活動を通じて連携を強め協力体制を構築しました。

芸術文化事業の醸成やつながりの創出は短期間で達成できるものではありません。2022年度も昨年度の事業を引き継ぎながらブロック内のネットワークを拡充し、より良い対話を生み出せるよう事業に取り組みました。なかでも自治体間の連携強化に注力し、事例報告や意見交換会の充実を図りました。また、ブロック会議では相談支援と合同企画展での作家紹介などを中心に意見交換を行い、研修会ではノウハウや考え方を学ぶため、支援センターの役割の再考と今後の活動に向けたレクチャーも実施。合同企画展では本事業の普及と支援センターの認知度向上を目指しました。

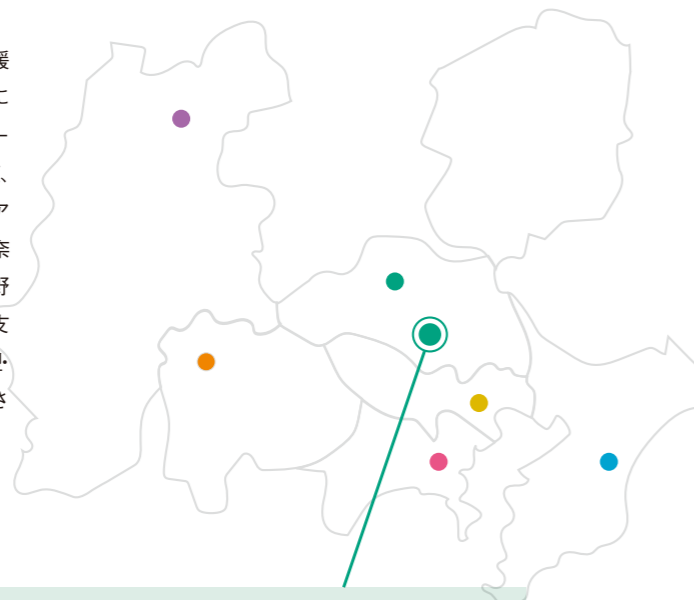
本書では今年度の中心的な活動を1冊にまとめています。各地で行われている障害のある人の芸術文化活動の発展に寄与し、本事業の支援センターだけでなく、この分野に関わるみなさまの取り組みの一助になれば幸いです。

南関東・甲信障害者アートサポートセンター



## 障害者芸術文化活動普及支援事業 南関東・甲信ブロック

障害者芸術文化活動普及支援事業では、全国を7ブロックに分け、それぞれに広域センターを設置しています。2022年度、南関東・甲信ブロックのエリアには、埼玉県、東京都、神奈川県、千葉県、山梨県、長野県があり、1都5県に7つの支援センター（埼玉県には基幹型・特色型の2センター）が設置されました。



南関東・甲信ブロック広域センター  
南関東・甲信障害者アートサポートセンター

### NOTE

南関東・甲信障害者アートサポートセンターの取り組みは、2017年度から実施されている「障害者芸術文化活動普及支援事業」の一環です。当事業は、障害のある人が芸術文化を享受し、多様な芸術文化活動を行えるようにするための事業です。地域における支援体制を全国に展開し、障害のある人の芸術文化活動の振興を図るとともに、自立と社会参加を促進します。都道府県ごとの「障害者芸術文化活動支援センター（支援センター）」、ブロックごとの「障害者芸術文化活動広域支援センター（広域センター）」、全国の「連携事務局」といった支援拠点を設置しています。全国に障害者の芸術文化活動支援の仕組みを整えると同時に支援センター、広域センター、連携事務局のネットワークを構築し、県境を超えて広域でも連携しつつ、地域での振興を図りながら全国規模で推進しています。

埼玉県支援センター（基幹型）

埼玉県障害者芸術文化活動支援センター  
アートセンター集

埼玉県支援センター（特色型）

ART(s) さいほく

千葉県支援センター

千葉アール・ブリュット  
センター うみのもり

東京都支援センター

東京アートサポートセンター  
Rights (ライツ)

神奈川県支援センター

神奈川県障がい者  
芸術文化活動支援センター

山梨県支援センター

YAN 山梨アール・ブリュット  
ネットワークセンター

長野県支援センター

ザワメキサポートセンター  
(長野県障がい者芸術文化活動支援センター)

2022年度より  
新設！

### 長野県障がい者芸術文化活動支援センター 愛称は「ザワメキサポートセンター」に決定



支援センター未設置だった長野県に、2022年度より長野県障がい者芸術文化活動支援センターが設置されました。愛称は108件の応募から県内中学生の「ザワメキサポートセンター」に決定。運営団体の長野県社会福祉事業団は支援センターの開設にあたり、これまでの取り組みを継続・発展させるとともに、ネットワークの輪を広げながら本事業を進めていくということです。

長野県の支援センター設置をもって、南関東・甲信ブロック内では全都県のセンター設置が完了しました。今後も広域センターでは、新しく設置されたセンターへのサポートや、支援センター間の連携などを支援してまいります。

## 2022年度の目標

各支援センターにヒアリングした課題と、ニッセイ基礎研究所作成の『全国の障害者による文化芸術活動の実態把握に資する基礎調査報告書（令和2年度）』を参考に、下記の通り2022年度の南関東・甲信ブロックの目標を設定しました。

### 1 支援センターの支援力の向上

主体的に対話し、学び合うことで各支援センターの支援力向上を目指す。

専門外の分野を強化したい  
(美術、福祉、舞台芸術)

### 2 ブロック内連携と相互フォロー体制の強化

ブロック内で協働し、相互フォローしながら「みんなで考える」体制を強化する。

中間支援組織としての  
役割とは…

### 3 鑑賞、発表機会の拡充

合同企画展の開催や、鑑賞支援の研修を通じて発表の場について考える。

鑑賞支援に対する知見が  
不足している

### 4 支援センター認知度の向上

情報を必要とする人に向けた最適な発信手段を検討する。

十分な広報活動を行っていない

### 5 基本計画未策定の自治体に向けた働きかけ

自治体と協働し、地域や分野を横断した事業の推進を目指す。

都県内全域で  
ネットワークを拡充したい

## 2022年度の事業内容

1 支援センターへのヒアリング

2 ブロック会議

3 各都県における事例報告・意見交換会

4 研修

5 合同企画展

6 情報収集・発信

## ■ 南関東・甲信ブロック広域センター 実施団体の紹介

### 広域センター

#### … 南関東・甲信障害者アートサポートセンター

各支援センターが協働し、相互フォローしながら「みんなで考える」体制をつくる。

障害者芸術文化活動普及支援事業で定められた南関東・甲信ブロックではこれまで、東京都アール・ブリュットサポートセンター Rights (ライツ)やART (s) さいほくが広域センターを担い、首都圏の豊富な芸術文化資源やネットワークを活かした事業を実施しました。新たな支援センターの設置や、自治体の基本計画策定も進み、ブロック全体の支援力向上に寄与しました。

2021年度より、みぬま福祉会が採択され、今後さらにブロック内の各センターが力をつけていくために、当センターでは各センターが主体的に参加できる事業を実施します。それぞれの知見や強みが発揮され、弱い部分はお互いに補うことができる「みんなで考える」ネットワークづくりを目指しています。



### 支援センター

#### … 埼玉県障害者芸術文化活動支援センター アートセンター集

障害のある人のアートの意義を県内に普及させ、魅力を伝え広げていく。

埼玉県では、2009年から福祉部障害者福祉推進課による「障害者アートフェスティバル」を実行委員会形式で毎年開催し、作品展やダンス公演、バリアフリーコンサートなどの事業が実施されています。行政が主体となり福祉、美術、教育等の機関が協働しながら、障害のある人たちのさまざまな表現を社会に発信してきました。またその一環で始まった「埼玉県障害者アート企画展」に加えて、「(障害のある人の)表現活動状況調査」もスタート。県内から集められた調査票から出展作品を選ぶという方法も生まれました。これらの事業にみぬま福祉会が継続的に携わってきた経緯をふまえ、2016年には本助成を受け「埼玉県障害者芸術文化活動支援センター アートセンター集」を設立。官民の連携が強化されました。ネットワークの醸成により、表現活動を始めの人や展覧会運営に携わる人、作品を楽しむ人たちが増えるなど、県内の障害のある人の支援は多様な形で広がっています。



### 実施団体

#### … 社会福祉法人みぬま福祉会

働くことを権利とし、どんな障害があっても、受け入れる施設。

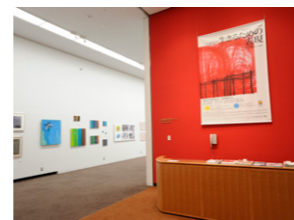
みぬま福祉会は、1984年に、重い障害を理由に学校卒業後の進路がない人たちのために「どんな障害がある人でも受け入れる」を理念に発足。「困難や例外的な状況にある人を切り捨てない」ことを大切にして、さまざまな困難を抱えた人を受け入れています。現在は埼玉県南部を中心に通所・入所・相談支援事業など22の事業を展開、利用者は300人を超えています。

#### ● 工房集プロジェクト

障害のある人の「表現活動」を社会につなぎ、新しい価値を創造する。

労働は権利と考えて活動の軸にし、「仕事に人を合わせるのではなく、一人ひとりに合わせた仕事をする」ことを大切にしてきました。当初は利用者が関われる軽作業（ウエスづくりや缶プレスなど）を行っていましたが、その作業に合わない人がいたことをきっかけに、利用者一人ひとりの想いに寄り添ったことで始まったのが「表現活動」でした。

しだいにほかの利用者にも表現活動が広がったため、みぬま福祉会の表現プロジェクトを社会につなげる活動拠点として、2002年に工房集を開設。「利用する人だけの施設としてではなく、新しい社会・歴史的価値観をつくるためにいろんな人が集まっていこう、そんな外に開かれた場所にしていこう」という想いを込めて「集(しゅう)」と名付け、アトリエ、ギャラリー、ショップ、カフェを備えました。設立時から、アートディレクター、デザイナーなど多分野の専門家と協働して、プロジェクトを展開し、現在は法人全体で11のアトリエを中心に150名ほどが、さまざまな表現を生み出しています。



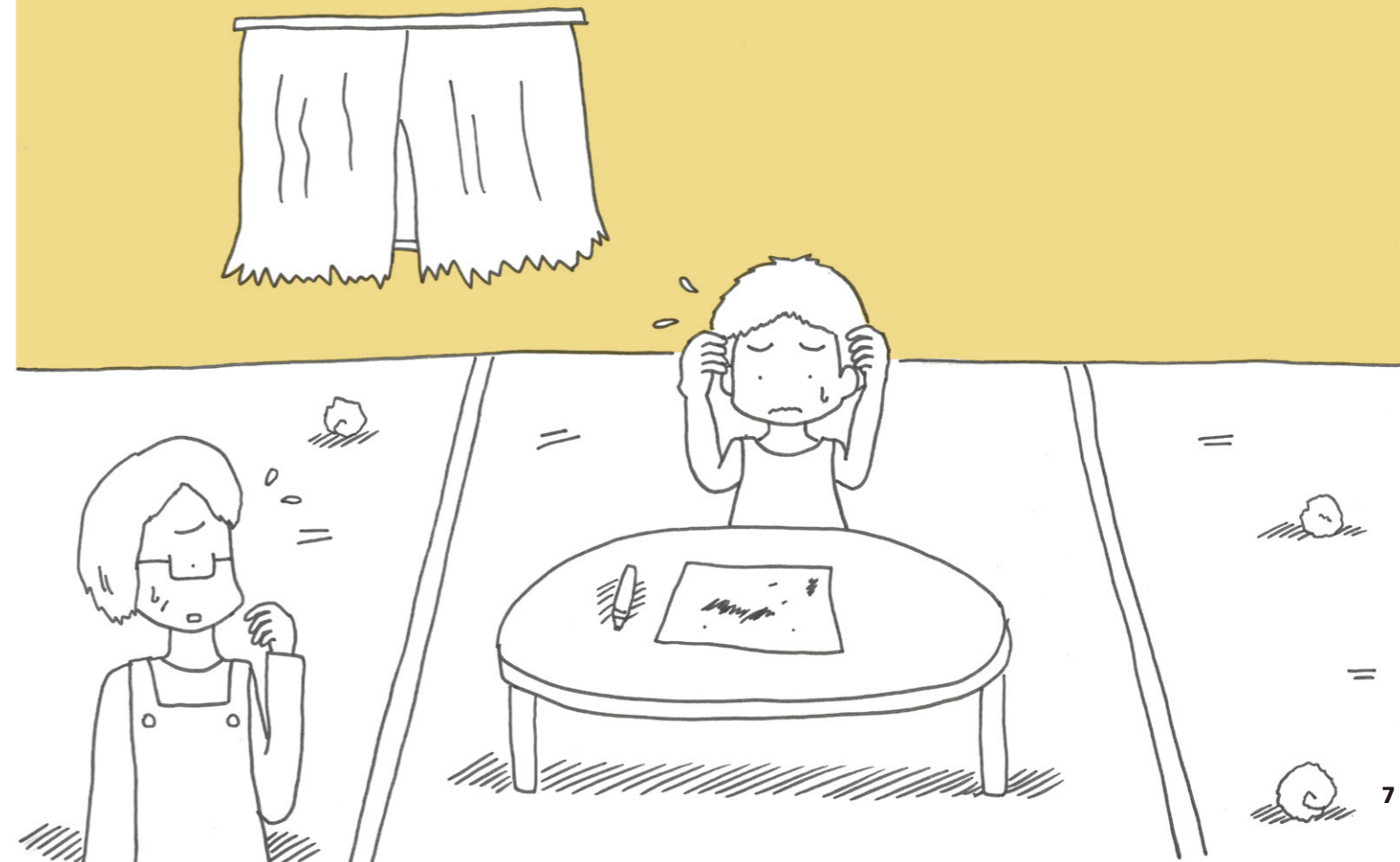
# Part 1

## EXHIBITION

# 合同企画展

本事業の普及を目指し、ブロック内の支援センターと合同企画展を開催。展覧会のテーマやタイトルも会議を重ねながら検討しました。出展作家は各支援センターから募り、作品に加えて作家とのつながりの経緯や制作の背景を会議で共有し、ディスカッションしました。その様子は p.40～41 に掲載しています。

※作家の創作背景や支援者とのつながりについて、本書に記載しきれなかった内容を当センターのウェブサイトで紹介しています。



南関東・甲信ブロック合同企画展

# カウンターポイント

—それぞれの寄り添うかたち—

## 開催概要

展覧会名: 南関東・甲信ブロック合同企画展

「カウンターポイント—それぞれの寄り添うかたち—」

開催日時: 2023年1月17日(火)～22日(日) 11:00-18:00 ※最終日は15:00まで

会場: 東京芸術劇場 アトリエイスト・アトリエウエスト  
(東京都豊島区西池袋1-8-1)

入場料: 無料

主催: 南関東・甲信障害者アートサポートセンター(社会福祉法人みぬま福祉会)

協力: 東京アートサポートセンター Rights(ライツ)、神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター、千葉アール・ブリュットセンター うみのもり、YAN山梨アール・ブリュットネットワークセンター、埼玉県障害者芸術文化活動支援センター アートセンター集、ART(s)さいはく、ザワメキサポートセンター(長野県障がい者芸術文化活動支援センター)、アトリエ響、まあるい広場、結の会、OUTBACK アクターズスクール

後援: 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

助成: 令和4年度障害者芸術文化活動普及支援事業(厚生労働省)

監修: 中津川浩章(美術家・アートディレクター)



## 開催の背景

南関東・甲信ブロックの1都5県に設置されている7つの支援センターによる展覧会です。

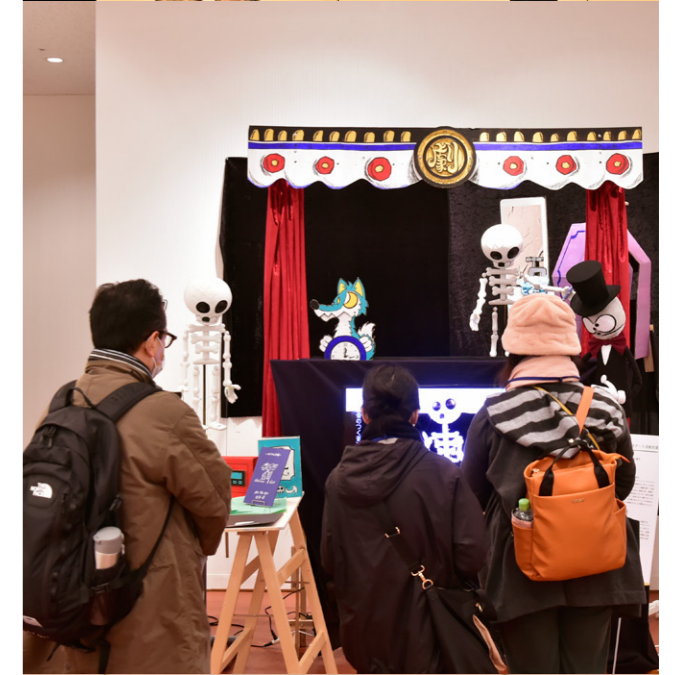
10年にわたり活動を深めている支援センターから今年設立されたセンターまで、地域性や継続年数は異なりますが、各支援センターはそれぞれの地域と人に寄り添い、ネットワークを構築しながら障害のある人の芸術文化活動を支援しています。

また近年、障害のある人の公募展や展覧会が各地で開催されています。こうした機運が高まるなかで、障害のある人の表現活動が活発になり、だれもが芸術文化に親しむことの大切さや、人の多様性、障害について考える契機となり、さまざまなつながりを生み出しています。一方で、美術の視点で作品の魅力を伝える作品主体の展覧会も多く、表現の背景が伝わりにくい面もあります。そこで本展では、「寄り添うかたち」をテーマに支援センターに相談してきた人、つな

がりがある人、プロジェクトに伴走している団体による絵画、立体作品、演劇、人形劇のジャンルを超えた多彩な表現と商品化などのプロジェクトに加えて、「地域×福祉×支援×表現」という切り口で各支援センターが出展作家やその地域にどのように関わり関係しているかを紹介し、その役割や存在意義について発信しました。

タイトルの「カウンターポイント」という言葉は、日本語で「対位法(たいいほう)」という音楽技法のことです。これは、複数の旋律がそれぞれの独立性を保ちながら、互いによく調和し重ね合う方法を表します。支援センターそれぞれの「寄り添うかたち」が集まり、協働によって重なり合うメロディを生み出すイメージで使用しています。

本書では、作家と各支援センターの活動紹介を、それぞれの視点からまとめました。



♣ Artist

さいとう・あすか

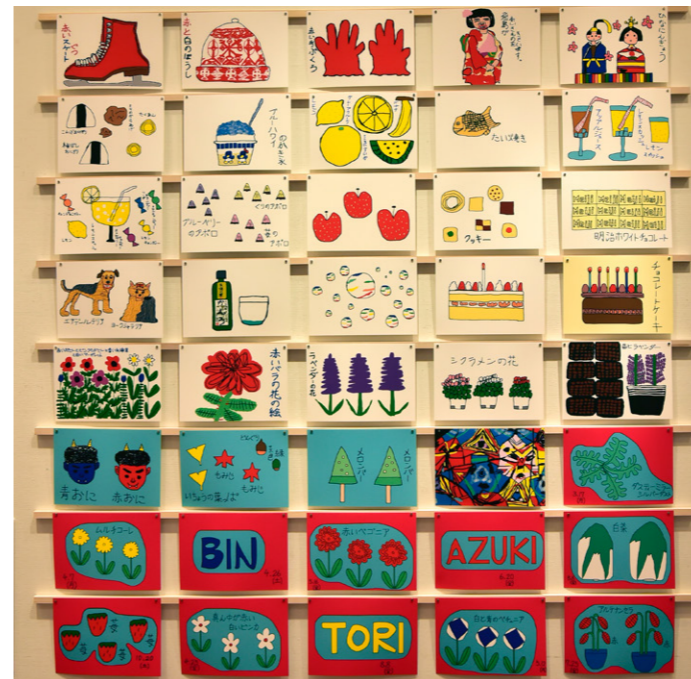
# 齋藤飛鳥

YAN 山梨アール・ブリュット  
ネットワークセンター

20年ほど前に支援員にパソコンを教わり、練習としてメニュー表を作成する際、得意な絵も描いたことをきっかけにパソコンで絵を描くようになる。パソコンに親しむなかで技術も向上し、目標であった全国障害者技能競技大会（全国アビリンピック）への出場もなかった。作品はペイント機能を使用して制作し、当初は日記や手紙に絵を添えていたが、次第にモチーフのみを描くようになる。描いているモチーフは水やりをしていた植物やお菓子などの身近にあるものや自画像など。思い出の品や記憶をもとに制作することも多い。モチーフの横に丁寧に名称や日付を書いているのも特徴である。作品が完成すると、本人が印刷するまでが一連の流れとなっており、作品は家族が大切にファイリングしている。



「あーちゃんず」としてグッズを展開



オリジナルプリントの布で制作した巾着袋

作家・家族 × 支援センターのあゆみ

齋藤飛鳥さんと  
ご家族

YAN 山梨アール・ブリュット  
ネットワーク  
センター

- 2003年
  - YAN 運営母体の施設で日中一時支援を利用
  - パソコンを使い作品の制作を始める
- 2016年
  - YAN 設立
- 2017年
  - 環境が変わり作品の発表機会がなくなる
  - 自宅で制作を続ける
- 2022年
  - 商品化に向けた研修動画を公開
  - チラシをきっかけに、家族から問い合わせ
  - 商品化に向けたワークショップを実施
  - 自宅訪問を重ね、作家と家族に寄り添う



♣ Support

## YAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンター

### …… 家族の相談からデジタル作品の商品化をサポート

#### パソコンを使用した作品づくり

齋藤さんは2003年頃からYAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンター（以下、YAN）の運営母体であるハヶ長名水会の日中一時支援を利用して、そこで職員からパソコンでの絵の描き方を学び作品制作を始める。もともと絵が好きだったということもあり、練習を兼ねて絵を描くことでパソコン技術も向上し、目標であった全国障害者技能競技大会（全国アビリンピック）への出場もなかった。

#### 家族から相談を受ける

YAN 主催の展示会にも出展したことがあったが、2017年頃からYAN スタッフが関わるアート教室がなくなったことで制作・発表機会もなくなってしまった。その後、2022年にYAN の事業で障害のある人の作品の商品開発に関する動画を公開した際、送ったチラシがきっかけで、母親から問い合わせがあった。今までデータを保管していただけの作品を活かす方法が何かないかとの相談を受けて、一緒に考え始めるようになる。

## × 齋藤飛鳥

#### 商品化に向けたワークショップを開催

イラストは齋藤さん自身がプリンターで印刷しており、それを利用して何か形にしてみようと提案。齋藤さんの自宅にYAN のスタッフが月1回ほど通い、作品を印刷した紙にレジンをコーティングしたブローチづくりのワークショップを重ねてきた。また、この作品を布地にプリントして巾着やバッグを制作するため、オンラインでの布地の注文も一緒に実施。母親が袋に仕立て、弟が篆刻を制作し、パッケージや作品にも使用。親や兄弟を巻き込んだ商品制作により家族の絆が深まっている。

#### マルシェで販売開始

2022年9月からYAN が紹介した他団体主催のマルシェで月1回の販売を開始。ブローチ、巾着、サコッシュなど、商品のバリエーションも増える。YAN のスタッフが何度も訪問するうちに、両親と飛鳥さんの関係性に触れる機会が増えた。齋藤家の子育ては「待つ」「無理はしない」「ともに楽しむ」ということを大切に、一人ひとりを励ましながら5人の子どもを育てたようだ。その家族の想いにYAN も寄り添い、齋藤さんの商品化のサポートだけでなく、家族との関わりも大切にしている。

From Staff

支援センタースタッフより

相談者の困りごとに対応するだけでは見えてこないことがあります。ご家庭や拠点に向き、さまざまなお話をするなかで、困りごとの周辺にある状況から当事者を知ることが大事だと考えています。齋藤家とは長いお付き合いですが、お宅にうかがうたびに新たな気付きや経験を得ています。



♠ Artist

# 笠原愁平

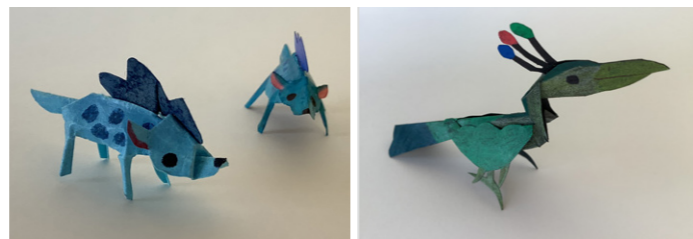
かさばら・しゅうへい

ザワメキサポートセンター

幼い頃から工作が大好きで、自宅でも学校でも毎日何かをつくってきた笠原愁平さん。折り紙やコピー用紙、紙粘土などさまざまな素材を使い、動物や鳥、虫、魚、恐竜などの生き物を、細部まで精巧につくり、手のひらサイズに仕上げる。納得がいくものができ上がると宝物のように大切に、学校でつくった作品はすべてビニール袋に入れて持ち帰るので、自宅の部屋は作品であふれていた。図鑑を見ながら、一枚の紙から形を切り取り、色をつけ、部分的に折りを加えて立体にしている。「頭のなかで展開図が見えているようだ」と支援者は話す。最近ではデジタル作品に凝り、スマホで画像を取り込んで色を塗っている。2017年に「ザワメキアート展」に出展。2022年にはザワメキサポートセンターの仲介により、展覧会「Brillia Art Gallery in Nagano」およびセンター主催展覧会「キララ☆展」などに展覧。



最近制作しているデジタル作品



〈どうぶつ〉(2点とも)



上：〈スバル360〉 / 下：ドローイングと立体作品の展示の様子



左：〈トヨタクイックデリバリー〉 / 右：〈ホンダ〉

# 尾澤佑貴

おざわ・ゆうき

ザワメキサポートセンター

小学3年生のときから24分の1スケールの旧車を制作。フリーハンドで切り出した段ボールのパーツをグルーガンで貼り合わせてつくる。その細部まで再現された車を尾澤さんは大切に持ち歩き、壊れたら修理する。修理が不可能になれば廃車とし、そのパーツはほかの車に使ったりもする。車の歴史・構造などを熟知して制作している。本展では、2019年に「ザワメキアート展」の出品作品をきれいに修理したものを展示。制作技術も上がり、以前はほぼ紙で作られていたが、ハンドルに針金、ヘッドライトにプラスチック素材が使用されている。最近では実際の車(特にスバル360)の方に興味が向いており、車を購入したいと話す。制作は通っている中学校で行っており、支援クラスの資金集めのために、車をモチーフにした花札を制作し販売した。

♣ Support

Nagano



## ザワメキサポートセンター × 笠原愁平・尾澤佑貴

(長野県障がい者芸術文化活動支援センター)

### ザワメキアート展

#### 作品の向こう側にある「モノガタリ」を見つける

2016～2019年に公募展として開催し、毎年20名の作品を紹介。実行委員等が作家の取材に行き、作品の背景にある制作の様子、本人の思い、家族や支援者との関係などまとめ、それをもとに審査を行った。展覧会を通じて一人ひとりの表現が生きる力や幸福につながることを伝えている。展覧会終了後も一部の作家の作品管理や出展サポートなども行っている。

#### 教育機関との連携

2016年は18歳以下の応募が6名だったが、教育機関への働きかけにより学生の応募が徐々に増え、2019年には34名に増加。2020年のアーカイブ集制作時に学生の支援を行っている教員との座談会を実施し、ザワメキアート展入選による家族の「マナザシ」の変化を共有している。



#### 「ザワメキアート展」の継続

2022年に本事業の助成を受けて、支援センター「ザワメキサポートセンター」が設置された。ザワメキアート展の事務局を担っていた長野県社会福祉事業団が支援センターを運営し、ザワメキアート展を継続。新たな試みとして、ゲストキュレーターをお迎えし、それぞれの視点からザワメキアートの魅力を紹介する。



from Staff

#### 支援センタースタッフより

ザワメキアート展は「福祉×美術」の委員構成と「丁寧な取材」を特長としており、これまでの実績はセンターの財産となっています。今後は展示関連の事業だけでなく、作品の貸し出しや保管などの新たな課題にも取り組んでいきたいと考えています。



♣ Artist

おぼた・みちる

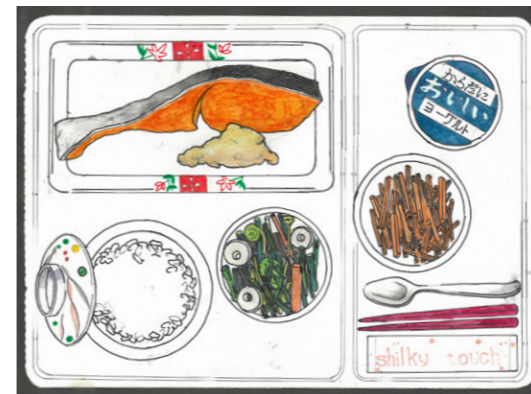
# 小幡海知生

アートセンター集

幼い頃から絵を描くことが好きで4歳から9年間造形教室に通う。35歳から自宅で本格的に制作を始め、40歳の頃、自閉症の画家の個展を見に行っただけを機に絵画教室へ通いコラージュ、版画、顔料などの技法を学ぶ。キルトや絵画などの展示会や水族館などに足を運び、その経験が作品に活かされている。2009年より埼玉県障害者アート企画展に毎年出展。2022年、NHKのドキュメンタリー番組『no art, no life』で特集される。



左から《遊Ⅱ》《こころの花火Ⅱ》《つながるころころ》  
《539人と13びきのころころ》



《食す》

こばやし・いちろう

# 小林一緒

アートセンター集

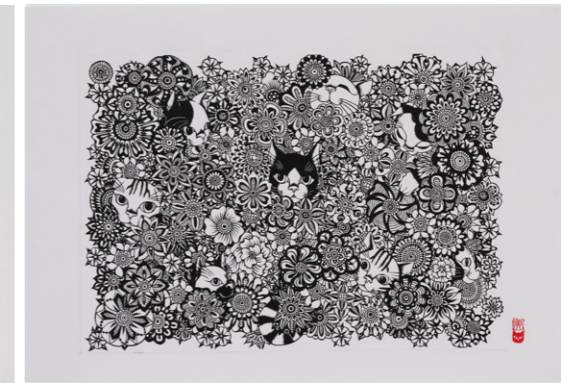
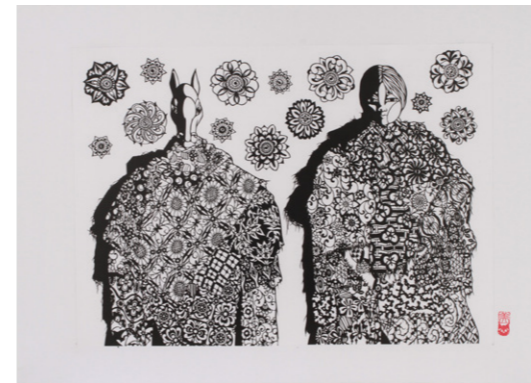
18歳頃から自身の食事を絵にするようになり、数百点の作品を描いてきた。「食べ物の味を思い出しながらかく」と話すように、本人にとって日記のような存在。調理師として働いていたが、退職した45歳頃に病気を患い歩行障害がある。理学療法士から「外出を促す支援はないか」と相談を受けた支援センター職員が提案し、地域の市民展に出展を始める。ある展示で行政職員の目に留まり2014年「埼玉県障害者アート企画展」に出展、注目を浴びた。現在は国内外での展示会に参加する。

こまき・みほ

# 小牧美穂

アートセンター集

ペン画を長年制作していたが、表現への限界を感じたことと著名な切り絵作家への憧れもあり十数年前より切り絵を始める。題材は日本民話を中心に『遠野物語』などに代表する民俗学への興味がある。そのほか女性や猫が多く登場。女性は自身の憧れや理想像を表現。作品制作は闘っているような思いだが、猫の作品を切り取るときはリラックスできるという。制作は大変だが、生活に張りが生まれ心身の安定にもつながっている。



左：《オシラ様》  
右：《かくれんぼ》

♣ Support



## アートセンター集 × 小幡海知生・小牧美穂・小林一緒

### ネットワークを活かした官民協働による展示会開催

#### みんなでつくる展示会

2009年、埼玉県障害者アートフェスティバルの一環として、「障害のある方の表現活動状況調査」が始まり、それをもとにした選考を経て「埼玉県障害者アート企画展」が開催。企画展の選考会では、行政、美術、福祉、それぞれの視点での対話を重視。発表機会の創出に加え、作家を取り巻く支援者の人材育成に主眼を置き、福祉施設職員の支援力の向上を目指している。

#### 施設に所属していない人へのサポート

「アートセンター集」には施設に所属していない人からの表現活動に関する相談が増加傾向にある。展示会を通じてそうした作家と関わる機会も多い。施設に所属していれば作品制作や発表機会などの支援を得られるが、所属していない場合は活動への課題が多い。作家によっては定期的に連絡を取り合い、展示会や公募展の情報提供や近況をうかがうなど、展示会終了後も関係性を継続している。

#### Project Memo

#### 埼玉県障害者アートネットワーク TAMAP ± 0 (タマップ・プラマイゼロ)

2016年「アートセンター集」により発足。行政職員、美術や教育の専門家、弁護士等を含めた、約30の福祉施設によるネットワーク。障害のある人たちの表現の魅力や支援のあり方を、毎月の会議や研修を通して学び合い、視座を高めている。また、対話を重ねながら多様な視点を取り入れ、みんなで展示会をつくり上げるプロセスを「埼玉方式」として発信。特色型支援センターの「ART(s) さいはく」とも連携を深めている。



from Staff

#### 支援センタースタッフより

埼玉県による事業を礎に活動するなかで多くの課題に気づきました。特に施設に所属していない人への支援の重要性を感じています。官民協働による企画展の継続に加え、当センターが運営を担うネットワークの参加団体や専門家とも連携しながら支援を広げたいと考えています。

♣ Artist

# コバヤシカオル

こばやし・かおる

ART(s) さいほく

社会福祉法人昴・デイセンターウィズおよび、まちこうばGroovin'に通所している。週4日は就労、1日はまちこうばGroovin'のアトリエで活動。自宅から持参したノートやペンを使用し、パソコンで調べた動画や、アトリエや自分の本などから題材を選んでいる。気に入ったモチーフが見つかったら、飽きるまで同じテーマを描き続ける。また、映画のポスターを見ながら描いた作品には、コバヤシさんが組み合わせた俳優の名前が添えられている。2009年に始まった埼玉県による「障害のある方の表現活動状況調査」と「埼玉県障害者アート企画展」が契機となり施設内で表現活動が広がり、定期的に出展を続けている。



〈えいがの絵〉(2点とも)

# 金澤一摩

かなざわ・かずき

ART(s) さいほく

『ピノキオ』のアニメを見て自分も人形に命を吹き込みたいと思い、4歳頃から人形づくりを始める。人形に命は宿らないと知り、一時はつくらなくなったが、NHKで放映されていた『クイントット』や『ひょっこりひょうたん島』などを見て再び制作を始め、登場人物の人形をつくるようになる。『ひょっこりひょうたん島』は、公演や展示など実際の人形を見て素材や構造を研究し、独学で改良を重ねた。高校生になると自身の物語に登場するオリジナルキャラクターをつくり始める。図面はなく、原画をもとに立体にする。人形劇の構想を教員に相談したことを機に、2020年「アートセッションin本庄」に参加。脚本・演出を手がけた『おばけのゴストント』を同級生や展覧会スタッフのサポートにより公演した。卒業後も、芸人や映画の登場人物などをモチーフに人形をつくり、本展では新作『ガイコツの一日』を紹介した。



脚本・演出・人形制作まで本人が手がける

♣ Support

## ART(s) さいほく × コバヤシカオル・金澤一摩

### ……表現を通じて関係性を育む

#### 一人ひとりの表現に「寄り添う」

コバヤシさんは「ART(s) さいほく」の運営団体、社会福祉法人昴の多機能型事業所に1997年より所属。当初は作品を手元におきたいという思いから発表にも抵抗があったが、ある作品展に出品したところ自身の絵の前で1時間近く立ち止まり嬉しそうに眺める姿があった。以来、作品を発表することに意欲的に。職員もテーマを一緒に考えて提案するなど変化が生まれた。

#### 特別支援学校との連携

相談支援事業では、地域の特別支援学校と連携して障害のある人の暮らしや仕事のサポートを行う。「人形をつくる生徒がいる」という情報が教員から寄せられ学校を訪問し金澤さんに会う。話をうかがったところ人形のほかコマ撮りアニメも制作しているという。そのとき本人から「いつか自分のつくった人形で人形劇をやるのが夢です」という言葉が出た。



#### Project Memo

#### まちこうばGROOVIN' —「面白いコト、楽しいコト」に出会う

2019年に東松山市に開設した通所施設。法人の利用者のアトリエに加えて、ギャラリーを併設。ギャラリーでは、定期的に所属作家や外部の作家を招聘した展覧会、ワークショップを開催するなど、訪れた人たちが「面白いコト、楽しいコト」を発見し交流できる場を目指す。オリジナルグッズの制作と販売も。



from Staff

#### 支援センタースタッフより

コバヤシさんの絵が詰められた紙袋は作品であり、絵を展示したい!という彼女の要望でもあると思います。作品のなかに願いが込められていることもあり、別の視点で本人と向き合うきっかけにもなります。金澤さんと出会ったときは彼の熱意をピンピン感じました。夢のお手伝いに関わられてとても嬉しいです。

♣ Artist

たかはし・ともゆき

## 高橋朋之

千葉アール・ブリュットセンターうみのもり

高校卒業後よりまあい広場に通所。ペン、クレヨン、墨といったさまざまな画材を使用し、身のまわりにあるものや植物、動物、楽譜などを描く。モチーフは職員が提案するほか本人と相談することも多い。職員と一緒にインターネットの画像や図鑑などを見ながら描くことが多く、コミュニケーションの一つとなっている。



左：〈コーヒーマグカップ〉／右：〈かじさんのあおいTシャツ〉

とどりき・もにか

## 等々力モニカ

千葉アール・ブリュットセンターうみのもり

まあい広場に所属。幼い頃から絵を描くことが好きで、自宅での様子や遠足などの記憶をもとに描き、本人もたびたび登場する。言葉は多くないが、職員が図鑑や雑誌をもとにモチーフを提案することも。0.3～0.5mmの水彩ペンを用いて集中して描き、作品の進み具合や描き込みの状況を見て、本人が興味あるモチーフかどうか分かる。



〈無題〉

♣ Support

# 千葉アール・ブリュットセンターうみのもり

…… 千葉県でのネットワーク構築を目指し、文化の素地を育むアートな場づくり

### つながりをネットワークに

2019年度から千葉アール・ブリュットセンターうみのもり（以下、うみのもり）が開設され、県内にある4つの団体を中心に県内のネットワークを構築。これまで交流のある団体と連携しながら芸術文化活動の普及に向けて活動している。なかでも「まあい広場」は長年関わりがあり、情報共有や人材の紹介などを行う。

### 専門性を活かしたワークショップの開催

うみのもりでは、運営団体の「たまあーと創作工房（以下、たまあーと）」で培ってきた表現の場づくりの専門性を活かし、音楽、詩、身体表現などの多分野でワークショップを展開。福祉施設から画材の使用方法やアート活動に関する相談を受けることが多く、「たまあーと」の講師が出張してワークショップを実施するなど、きめ細かな対応を行っている。

きずもと・よしだか

## 梶本吉隆

千葉アール・ブリュットセンターうみのもり

まあい広場で20年以上、絵を描いてきた。当初は動物を描いた具象的な作品だったが、近年ではクレヨンを塗り重ねた作品を描くようになった。床に画用紙やキャンバス、かたわらに画材が入る段ボール箱を置きしゃがみ込んで描く。土を掘るのも好きで、その感触が絵に反映される。作品にはテーマがあり、本人の体験をもとに描かれていることが多い。



左：〈りんご〉／右：〈さくら〉

やまもと・みのる

## 山本実

千葉アール・ブリュットセンターうみのもり

たまあーと創作工房に小学1年から20年以上通う。3～4年の周期で題材が変化し、過去には電車の絵画や安土桃山城の立体作品を制作。5年前より新聞紙や薄紙を使用して縮小させた富士山の立体を制作。週1日、仕事のあとに造形教室に通い、作品をつくる。祖父と富士山に登山したことが制作に影響しているよう。



〈富士山〉 Photo：竹村浩輝

高橋朋之・等々力モニカ・梶本吉隆・山本実

### Project Memo

#### まあい広場

——一人ひとりの役割を活かしたぬくもりの手仕事

障害のある子どものお母さんたちとボランティアで行っていた遊びのサークルが基盤となり、1994年に千葉市美浜区で開所。2006年に移転。一人の作品が画廊に展示されたことを機にアート活動にも取り組む。一人ひとりが大切にされる社会を目指す。和紙制作から始まった手仕事は手織り、刺繍、染め物、縫製などに広がっている。

### Project Memo

#### たまあーと創作工房

——未来に続くアートのたねまき

1998年にスタート。アートを通じて得られる根源的な「楽しい」「嬉しい」「発見する喜び」を経験できる場づくりに取り組む。障害の有無にかかわらず、子どもの美術造形教室だけでなく、大人の絵画教室も開講しており、受講生は150名を超える。また出張授業で保育園や小中学校などでもアートを通じて共育活動を行っている。

From Staff

支援センタースタッフより

まあい広場の運営母体、社会福祉法人九十九会は50年前から障害者福祉に取り組んでいます。山本実さんも幼少期に九十九会を利用していました。また、たまあーとでは、「アート」は社会のなかに組み込まれていてこそ「アート」なのではないかと思い、たどり着いた活動が「共育」でした。

♣ Artist

くわはら・ひさこ

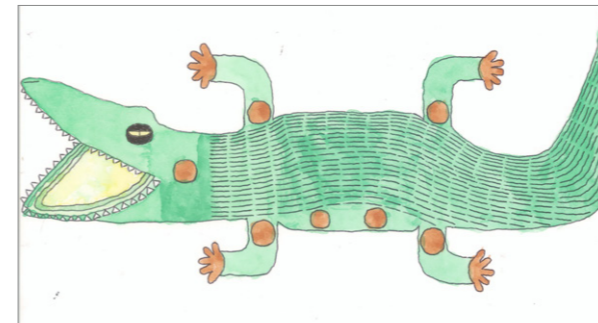
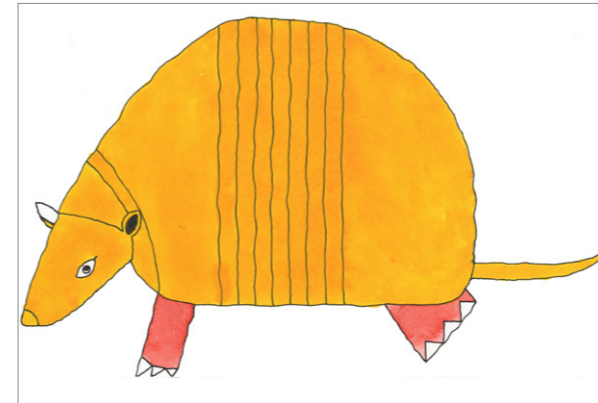
# 桑原詠子

東京アートサポートセンター Rights (ライツ)

2007年のアトリエ響設立時から通う初期メンバーの一人。アトリエ響での活動は本人にとって大切な時間で、母親とともに悪天候の日も欠かさず足を運ぶ。出かけることが好きで、特に電車に思い入れがあり、この15年間大好きな「京王線」を描き続ける。クレヨンを使用して勢いよく描かれた作品は、どれも近い印象を受けるが、筆跡や色合いは一つひとつ異なっている。自宅にはこれまで描かれた千点以上の作品の数々を家族が大切に保管する。



《京王線》



上：《アルマジロ》 / 下：《ワニ》

こさか・しんいち

# 小坂真一

東京アートサポートセンター Rights (ライツ)

2007年より結の会に所属し、チラシの<sup>ちょうあい</sup>丁合や納品、アパート清掃などの仕事のかたわら絵を描く。高校時代の友人から「彼はとても面白い作品を描く」と職員が聞きアートのプログラムに誘った。初めは躊躇していたが職員との関係も育みながら次第に描くように。小坂さんが興味のあるものを職員が探し、図鑑やインターネットから一緒にモチーフを選ぶ。描く前に画像を観察し、じっくりと構想を練ったあと、丁寧にペンを走らせる。

おかもと・さとみ

# 岡本智美

東京アートサポートセンター Rights (ライツ)

2019年より結の会に所属。内職などの仕事をしながら作品を制作。モチーフは施設の庭に咲く花などの身の回りものから、本人の興味がある妖怪など幅広い。図鑑や自身のスマホで調べた画像を見て、キャンバスにアクリル絵具で勢いよく描き、縁や裏側の生地にもまで描き込む。制作を続けるうちにキャンバスを好むようになった。作品を見てあふれた言葉は職員がメモに残し、展覧会で作品に添えて紹介している。



左：《太陽の塔》  
右：《赤い車》

♣ Support



## 東京アートサポートセンター Rights (ライツ)

桑原詠子・岡本智美・小坂真一

From Staff

支援センタースタッフより

### 地域のなかで障害のある人やその作品と出会う場



ギャラリーカフェ「喫茶オーレ」



Photo: たかはしじゅんいち

#### かてかてアート展～まちと障害とアート～

2021年度に開催した「かてかてアート展～まちと障害とアート～」は八王子地域の福祉関係者やまちづくり、ものづくりに携わる人たちと、福祉事業所間のネットワークをさらに広げ障害者と地域の人々がつながることを目指して開催。商業施設やカフェなど、計27カ所で160名による300点以上の作品が展示された。このプロジェクトでは八王子の人々14名が参加する実行委員会が立ち上げられ、本展ではそのうちの2名が所属するそれぞれの団体から作者を紹介する。

#### Project Memo

##### アトリエ響

——創作の場から人と人をつなぐ拠点に

2007年に知的障害のある方を対象に八王子でスタートした絵画クラブ。毎週日曜に開講し、現在は6名が通う。作品レンタルプロジェクトのほか、2022年に西八王子にギャラリーカフェ「喫茶オーレ」をオープン。作品の魅力を伝え、人をつなぐ拠点として地域に活動を広げる。主宰の平岡直生さんは、八王子市内の福祉施設でのアート活動にも携わっている。

#### Project Memo

##### 結の会

——ともに学び、ともに生きる

1984年にさまざまなハンディのある人たちが地域でともに暮らし、働き、生きていける場をつくりたいという思いのもと設立。メンバー一人ひとりを尊重し、和紙、石鹸、ジャムなどの制作に加えて、アート活動にも取り組み、てぬぐい、カレンダー、Tシャツなどのオリジナルグッズも販売。「働き・学び・楽しむ」ための空間づくりを大切にしている。

東京都では創作活動をしている施設や団体が各地に多くあり、そのなかには独自に展覧会や作品を利用した商品制作などを行っているところも少なくありません。そのような活動がそこで暮らす地域の方々となつたり、誰もが暮らしやすい社会となることを目指して、ライツは活動をしています。

♠ Artist

# OUTBACK アクターズ スクール

神奈川県障がい者  
芸術文化活動支援センター

2021年に神奈川県内を中心に精神医療に関する人権擁護活動や当事者の声を発信する活動などに取り組む、神奈川精神医療人権センターの関連事業としてスタート。神奈川精神医療人権センターに関わる当事者を中心に構成され、精神障害のある当事者の声を演劇などの芸術活動を通して社会に向けて発信する活動を行っている。メンバーは公募で集め、プロの講師や演出家に関わりワークショップを重ねて公演をつくり上げている。

## 演じることで人生が変わる

OUTBACK アクターズスクールは、精神的に不調を抱える人たちが、演劇活動を通して、自身の生き方、社会のありようを問い直し、表現力、発信力を身につけていくことを目指している。メンタルヘル스에不調を抱えている人のなかには、病そのものの苦しみだけでなく、社会からの偏見、差別の眼差しによって、より一層生きづらさを抱え込んでいる人が多い。彼らが生きづらさを超えて社会のなかで活躍していけるよう、パフォーマンスアーツを通じて社会に問題を提起し、問い直している。

2021年4月に開校以来、プロの俳優を講師に招いてワークショップを積み重ね、2021年11月7日の第1回主催公演、そして2022年11月3日の第2回主催公演はともに超満員札止めの成功を収めた。本展では開催に向けて行われたワークショップの様子を写真で紹介し、公演の映像を展示した。

©ワークショップ講師：中村マミコ（OUTBACK アクターズスクール校長）、前原麻希（俳優）、加藤啓（俳優）

※ワークショップの様子は「OUTBACK アクターズスクール」ウェブサイトより出典

### 第1回主催公演『まだ見ぬ世界へ』

日時：2021年11月7日（日） 会場：横浜人形の家 あかいくつ劇場  
スクール生たちの実体験をもとに構成された約40分の劇は、「思考伝播」という症状を自覚するトモキチが主人公。彼は、ストレスが積み重なって家で暴れ、強制入院させられます。絶望に苛まれるトモキチでしたが、病院で出会った個性豊かな患者たちの力で次第に癒され、ある宝物の存在に気づきます……。

### 第2回主催公演『漂流アイランド』

日時：2022年11月3日（木） 会場：横浜人形の家 あかいくつ劇場  
「異質」を異様にこわがる島国に漂着したマルちゃん演じるガリバーは、何も悪いことをしていないのに身体拘束されてしまいます。「自意識過剰な統合失調症」を自称するマルちゃんは、「精神疾患やその患者が偏見の対象になっていること」に対して、当事者である我々の鬱屈した思いを、劇を通して社会にフィードバックしたい」との思いを抱き、本番に臨みました。



「演じることで人生が変わる」OUTBACK アクターズスクール第1回演劇公演の全記録オリジナル劇『まだ見ぬ世界へ』DVD付き  
2022年／編集：佐藤光展／発行：OUTBACK プロジェクト



♣ Support

## 神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター

### …… 舞台芸術分野と中間支援組織の専門性を活かした連携

#### 福祉と芸術文化の関わりを考える場づくり

神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターの運営団体である認定NPO法人STスポット横浜は、小劇場「STスポット」の運営、学校や福祉施設への芸術家派遣、地域のアートプロジェクト支援などを行う。2015年度からは、文化庁委託事業や神奈川県との協働を通して、福祉と芸術文化の関わりについて考える場をつくり続けてきた。

#### アーティストによるワークショップ実施

2016～2018年度に、横浜市神奈川区にある精神障害者の通所施設「地域活動支援センターひふみ（以下、ひふみ）」にて、芸術家による造形や音楽などのワークショップを行った。芸術文化活動が、福祉施設と地域の関わりを深め、同じ障害のある仲間と楽しみを共有するきっかけとなっていた。

## OUTBACK アクターズスクール



#### OUTBACK アクターズスクール発足

「ひふみ」に勤めていた支援員がのちにOUTBACK アクターズスクールをスタート。神奈川精神医療人権センターに関わる当事者を中心に構成され、精神障害のある当事者の声を演劇などの芸術文化活動を通して社会に向けて発信している。

#### 活動の広まりに向けて協力

活動継続のための資金獲得や広報について、支援センターに対して相談があった場合にに応じている。OUTBACK アクターズスクールのように、当事者が主体的に関わり、表現を発信する取り組みはまだ多くない。障害のある当事者や支援者などから相談があった場合には、先進事例として紹介している。

From Staff

#### 支援センタースタッフより

自身と同じ舞台に立つ仲間、そして社会と向き合いながらOUTBACK アクターズスクールの演劇ができています。県内にはほかにもさまざまな表現、それらを通じた出会いと対話が生まれています。各取り組みを顕在化しつなぐことで、芸術文化に触れたり表現したりする場が豊かに広がっていくことを目指しています。

## REVIEW

## 「カウンターポイント—それぞれの寄り添うかたち—」を振り返って

合同企画展について、監修者や作家の家族、来場者アンケートの声を紹介します。

## 中津川浩章(本展監修)



今回の展覧会は、いわゆる美術だけでなく演劇、人形劇、プロダクトへの試みなど多様なコンテンツが展示されたことによって各支援センターの取り組み、地域によっては社会課題が見える化されたプロジェクトになりました。知り合いの精神疾患のある画家の方が OUTBACK アクターズスクールの動画を見て、まだ自分にはできることがあると感動していました。異なった領域に橋をかけていくことで、今まで異なるとされていたことが実は共有できると感じる。それがより豊かな活動につながっていくことを確信しました。福祉×アート、障害×社会など領域を拡張することで更に様々な人たちの心の中に<sup>くまび</sup>楔を打っていくことになるのだと思います。それがこの活動の大きなミッションの一つだと感じています。

## 出展作家・小幡海知生さんのご家族のお手紙(一部抜粋)

スタッフの皆さんの温かい言葉がけ、そして来場していただいた方との対話。ずっと人とかかわりたいという海知生の思いが、大勢の方に絵を観てもらえ……人とのつながりを、そして思いを、スローペースですが本人の成長になっているのではと感じています。こうした作品を出させていただき、心から感謝しています。

## 来場者アンケートより(一部抜粋)

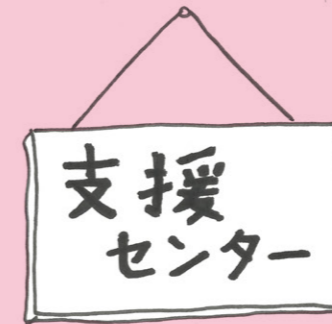
- どの作品も良かった。一人の作品が数点展示されていて興味深い。このような活動がもっと一般の人に知られるようになれば良いと思います。(70代以上・美術関係者)
- アートのみならずパフォーマンス、音楽など幅広いジャンルに取組まれている方たち、一緒に走っている方たちに触れられて楽しかったです。(20代・会社員)
- 作品群にパワーがあり、元気をもらえる。(30代・会社員)
- 昔、イラストレーターの仕事をしていましたが、絵を描くことが楽しくなくなって辞めました。障害のある方の作品の自由さ、一般人にはないセンスの良さはほんとうに魅力的で見ていて楽しくなります。本の装丁やポスターなど、あらゆる形でこの作品たちがどんどん世に出ていったらいいなあと感じました。(50代・福祉関係者)
- 私が絵を描くと、限られた種類の色や線というつまらぬ構成になる。しかし本日拝見した作品はどれも巧緻性が高く、絶妙な色遣いとアクセントに感銘を受けました。皆さまのもつもの見方、捉え方、表現方法は唯一無二であり、今後どこかで作品を鑑賞させていただければ幸いです。(20代・医療関係者)
- ぼくは統合失調症なので、人ごととは思いません!もっと生きやすい社会をつくってほしいです!当事者としてこの社会は生きづらいです!働いています!苦しいです!(50代・当事者)
- 福祉を学んでいる大学生です。作家さんをはじめ、支援者や関係者の方、この分野に関心がある人が集まり意見交換ができるような機会があると嬉しいと思いました。(20代・学生)
- 全てが素晴らしい。想像を絶する。まさに noart nolife の世界。(70代以上)
- 個性豊かなそれぞれの作品を楽しむことが出来ました。「障がいの」という枕詞はもはや不要では?と思うほどであり、近い将来、障がいのあるなしに関係なく開かれる展覧会が行われるといいと思います。(50代・福祉関係者)
- 才能ある方々も多く、その才能を世に発表するサポートは大切。ご本人たちも大変とは思いますが、晴れの場として必要だと思います。これが何とか多くの人のサポートに繋がる方法があると良いですね。(60代・ガールスカウト)
- すべての作品が、それぞれ個性があって素敵だなと思いました。どのような気持ちで作品に取り組んでいるのか、とても知りたいところですが、それを表現することは難しい方々でしょう。でもこちらとしてはそのことを想像しながら鑑賞するのがとても楽しかったです。どのように作品を作っていたかの説明文があったのは、その様子が想像できてとても楽しめました。(50代・医療関係者)
- すばらしいです。もっともっと皆に知ってもらえたら良いと思う。普通学級の児童と障害学級、学校との壁をなくしていくことが大事だと思う。こんな才能を普通学級の子に見せてあげたいと思う。(70代以上・元教員)
- 絵の着眼点のユニークさが面白かった。譲ってほしい作品が何点あった。作品から受ける波動に涙したものがあった。(50代・美術関係者)
- 展示の仕方により作品が本来持っている魅力がより際立っていました。東京芸術劇場の来場者全員に見てもらえるように劇場エントランスでの広報がより強くなればいいなあと感じました。素晴らしい展覧会に感謝です!(40代・美術関係者)
- 「アールブリュット」や「障がい者アート」のようなカテゴリーは何故生まれるのか考えさせられる内容でした。(30代・美術関係者)

## Part 2

## TRAINING

## 研修

支援センターのより良い活動に向けて、各分野の専門講師による、3つの研修を開催しました。ここではその内容を紹介します。オンライン開催の利点を活かし、他ブロックの支援センターからも、多数の参加がありました。参加者の感想は p.34 に掲載しています。



# 1. 支援センターによる 中間支援の取り組みを学ぶ

障害者芸術活動支援センター@宮城 (SOUP) / 南東北・北関東ブロック広域センターの柴崎由美子氏と、FACT 福岡県障がい者文化芸術活動支援センター/九州障害者アートサポートセンターの樋口龍二氏を迎え、「はっけよい、のこった! 東西対決~支援センターの中間支援の役割と意義について~」と題して、支援センターが担う中間支援の役割と意義について話しました。[2022年9月6日(火)、オンラインにて実施、34名参加]

講師



しばさき ゆみこ  
柴崎由美子 (障害者芸術活動支援センター@宮城 <SOUP>)

1973年宮城県生まれ。NPO法人エイブル・アート・ジャパン事務局長、代表理事。芸術大学在学中に障害のある人の作品に出会い、制作の現場に関わりたいとの思いから、1997年から奈良市の「たんぼの家」の活動に参加。2004年たんぼの家アートセンターHANAの開設に関わり、2009年までディレクター。2007年エイブルアート・カンパニー事業をスタートし現在は東北事務局を兼任。2011年の東日本大震災後、東北の障害のある人たちに向き合いたいと考え、関東・東北地域のアーティスト・リサーチなどに関わる。



ひぐちりゅうじ  
樋口龍二 (FACT 福岡県障がい者文化芸術活動支援センター)

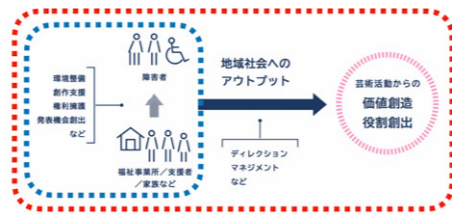
1974年福岡県生まれ。1997年に福祉作業所「工房まる」と出会い、障害のある人たちの表現に魅了され転職。2007年よりNPO法人まる代表理事を務める。東京と奈良のNPOと共同設立した「エイブルアート・カンパニー」福岡事務局長を兼任。2015年に福祉事業所の商品と物語を発信する「(株)ふくしごと」を、地元企業やクリエイターたちと共同設立。障害のある人たちのアートを仕事につなげるなど、多様な人々を包括できる社会を目指してさまざまなプロジェクトに取り組んでいる。

概要

## 宮城のSOUPと福岡のFACT

研修の前半では、柴崎氏と樋口氏がそれぞれの活動についてプレゼンテーションし、後半では3つのテーマについて話しました (p.27-29)。ともに、エイブルアート (可能性の芸術) の概念を生んだ奈良市の「たんぼの家」で多くを学び、プロジェクトを協業してきた同志でもある二人。柴崎氏は現在、NPO法人エイブル・アート・ジャパン代表を務めながら、地元宮城県でSOUPとして活動を展開しています。プレゼンでは、垣根を越えたネットワークづくりにおいて重要な点として、市や県、行政の課をまたいで定期的に実施する委員会や、年に一度、市や県とともに開催する展示会「見本市」について紹介。また、施設に属さない個人作家に情報を届けるための取り組みについても触れました。福岡県で活動する樋口氏は、過去に実施したさまざまなアンケート結果をもとに支援センターの存在価値や可能性を示したうえで、相談支援、支援する人材の育成、関係者のネットワー

クづくり、発表機会の確保などFACTでの主な事業内容を解説。支援センターの役割は、当事者や支援者に対して環境整備や権利擁護、発表機会の創出などがありますが、もう一方で生まれた作品を社会にアウトプットしていくためのディレクションやマネジメントをサポートすることが大切だと考えています。福岡県内の文化施設と連携して障害のある人たちの鑑賞サポートや発表機会を増やしていくことを目的とした相談会や体験ワークショップを開催しています。



樋口氏による支援センターの「支援」の図。青と赤の囲みで2種類の支援を示している。

## 3つのテーマで 「はっけよい、のこった!」 中間支援に大事なことは?



広域センターが用意した3つのテーマ「二人が活動を続けるうえで大切にしている思いや考えを教えてください」「よりよい中間支援を行うためには?」「支援センターの『伴走』とは?」について答えながら、中間支援を行ううえで、二人が重視していることが話されました。

theme

### 1 自然と変化していく構造をつくるために

——お二人はこれまで20年以上にわたり、アートと福祉の分野で活動を続けてこられています。大切にしている思いや考え方を教えていただけますか。

柴崎: 私は大学卒業後、奈良県にある「たんぼの家」という市民団体で活動を始めました。たんぼの家はさまざまな障害のある人が通っていますが、そのメンバーとスタッフとボランティアがみんなて話す文化があって、そこでは友人がほしい、遊びに行きたい、誰かとお付き合いたいといったごく普通の思いを話したり、それをどう支えられるかをみんなで考えたりしていました。障害のある人も同じ時代を生きる仲間としてともにいられたことが、振り返ると私にとって大切な経験となったと思います。

活動としては、「こうあったらいいな」を実現するために必要なことをシンプルに実施してきただけなのですが、そのためにはさまざまな人の力や戦略が不可欠でした。障害がある人自身の声を原点に、彼らの幸せを思って考えたことが、徐々に制度や政策に反映されていく時代となりました。支援センターという仕組みや制度はそのなかで形になったものですが、それが当たり前になると要綱をベースにルールとして働くこともあり、それが一番こわいですね。今の社会のなかで支援センターがどんな役割を果たしていくべきか、絶えず問題意識を持って歩まなければならないと思います。職歴が長いほど、フレッシュな感覚を持ち続けることは難しいので、若い人たちの声に耳を傾けながら活動したいです。

樋口: 福祉の世界で働き始めた頃、

障害のある人たちが施設や学校に集団で活動していることに違和感を感じていました。福祉は専門的で特殊な仕事ととらえられがちだけれど、社会と分け隔てられてサポートしていても将来は見えないし、地域社会とつながりを構築することで、自分らしく生活するための環境を選択できる経験を積んでいくことが大切だと考えています。それぞれの地域でハッピーに過ごしていくためには、人や場所の関係を構築しながら、社会側が障害のある人たちの存在を受け入れて環境を構築しないと状況は変わらないと思いました。まずは一人ひとりの気づきから、その価値観が地域に派生していくことを抱きながらプロジェクトを企画しています。地道で時間はかかりますが、継続することに大きな意味があると思います。センセーショナルで大きなプロジェクトが一つあればいいわけではなく、とにかく小さな課題を解決していくためのプロジェクトを他分野の人たちと一緒に実験的にやってみることも大切です。過去の活動に参加した方から、障害のある人を雇用しているとか、家族の介護を躊躇なくできたなどの話が聞けると、成果の一つとして喜びを感じます。他分野の人たちを巻き込んでいくのは、自分の将来のためにもなると思ってやっています。親や自分自身に介護が必要になったり、子どもが生まれたりといった場面で、支援やボランティアとして手を差し伸べる関係だけではなく、関わることで互いにハッピーになれる、そんな相互関係が増えたらいいなと。楽しく関わるうちに自然に自分ごととして変化していく構造をつくるために、日々努力している感じです。



SOUPの活動のなかで、さまざまな表現の場に出会った。写真は特別支援学校の美術教員が自宅を開放して卒業後の障害のある人々を支援していた例。

g'heme

## 2 環境が変化することが真の公共事業

——より良い中間支援を行うことと、その先にある未来について、どのようにお考えでしょうか。

柴崎：「愛だけじゃ駄目、技術も必要」というのは、よくいわれる言葉です。課題解決のためには、時にはクールな面も必要です。具体的にいうと、例えば厚生労働省の「障害者による文化芸術活動の推進に関する基本的な計画」のなかで示されている支援ガイド（活動のコツ）がありますが、私たちはそれを参考にして活動しています。加えて中間支援として必要なのは、できていないことをきちんとやることです。つまり、自分たちの支援センターの弱みも冷静に把握し、変えていくこと。行政の方たちはエビデンスにもとづいて、必要と判断される仕事に真摯に取り組まれるので、支援ガイドをもとに全国と比較して自分の地域に足りていない部分を明らかにし、翌年の実施計画に活かします。例えば宮城県では年間4～5本の研修を行います。内容は毎年変えています。今年は「出口戦略が弱い」というデータにもとづき、作品の二次利用や販売に関わる地元企業の方との研修や、文化施設の方向けに支援センターとの連携に関する研修を実施します。

それから「高い次元の公益事業を」というのはたんぼの家の理事長であり、エイブル・アート・ジャパンの生みの親でもある播磨靖夫さんの言葉です。要は、自分たちの成功事例を他者と分かち合い、できる人を増やす。そうして環境が変化することで初めて公益事業といえる、ということです。作品が発表や販売できた、で終わらずその活動を通じて誰の何を実現したいのか、絶えず先を意識して、目線を遠くにもっていくことが大事だと学んできました。

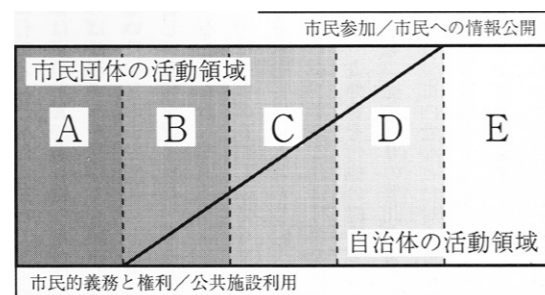
樋口：福岡で活動を始めた1997年頃は、作業所でアートをしていることを地域（特に福祉業界）に理解してもらえていませんでしたが、当時、僕らの思いや考え方を応援してくれる人や場所が全国各地にありました。そのネットワークで教えてもらった「障害は間にある」という言葉は、自分たちの在り方に勇気を与えてくれて、活動を継続する自信になりました。人に言葉で思いや考えを伝えることはすごく大切だと思っています。福祉用語を並べても他分野の人たちには伝わりにくいし、行政が作成した仕様書をそのまま見せても企業には伝わらない。障害者福祉の課題を正しく真面目に社会に提示しても関わり方がわからないんです。僕たちの役割は障害のある人たちと社会の関わり方をクリ

イティブしていく立場だと考えています。クリエイティブに変革していくためには、言葉の変換も大切です。「世の中には、行政用語と民間用語とビジネス用語があるよ」というのもネットワークで教えてもらった言葉です。

今、社会で謳われている「多様性」や「SDGs」は、現在の課題に対するための言葉ではなく、当たり前のことを当たり前にしていく考え方であり、目標にする言葉ではないと思っています。センターの活動は、福祉の枠のなかでの障害者支援にとどまらず、柔軟な関係を構築していく社会づくりとして、とても有効な活動です。そういった役割を社会で担える存在として、自分たちで新たな価値をつくっていくことも必要だと思います。

柴崎：播磨さんには、「行政語、企業語、市民語の3つの言語を持って」と言われていましたよね。日本NPOセンターの顧問のお一人である山岡義典さんが、協働の概念を図で示していますが（下図）、本当の協働は、市民団体の活動領域と自治体の活動領域が拮抗するところであって、そこでは互いに対等の関係です。地域に不足している仕組みづくりや、そこにどう予算を使うかといった議論は、行政からの委託事業であっても、本来は対等の立場で行うのが支援センターの役割であり、それを担う法人の責任です。

また、NPOや支援センターと同様に、行政や企業にも、それぞれに理念や行動原理、特性があります。どう仕事を分かち合っていくか、相手の目を見ながら活動することが大切です。行政語、企業語、市民語というそれぞれとの対話のための言語とともに相手の理念や行動原理、特性も学んで、協働の仕方も巧みに使い分けていくべきです。



地域の社会サービスの供給における市民団体と自治体の役割分担の諸領域の図。山岡義典『時代が動くとき—社会の変革とNPOの可能性』（1999年、ぎょうせい、p.131）より。A＝市民団体あるいは民間だけでやる領域、B＝民間が主体で行政は民間の主体性を活かしながら関わっていく領域、C＝行政と民間が対等な関係で事業を行う領域、D＝行政がやり方を決めて民間団体に委託したり委任したりする領域、E＝行政が責任をもつてやる領域。



左：展覧会や上映会、ワークショップ、グッズ販売などを行った「ツナガルアートフェスティバル FUKUOKA」（2022年、博多阪急）にもFACTが協力／右：FACTによる芸術文化活動を支援する人材を育てる、文化と福祉のマッチングプログラム「現場体験ワークショップ」（2021年）

g'heme

## 3 中間支援の「伴走」のあり方

——支援センターの相談事業では、「どこまで踏み込むべきか」が悩みどころです。中間支援の「伴走」とはどうあるべきか、お二人のお考えを教えてください。

樋口：運営している「工房まる」では、スタッフに対して「支援とは伴走すること」と伝えています。目的地に行く意思はあくまで本人が選択するのであって、目的や欲求に向かうスピードを調整したり、道中で見えるいろいろな景色や出来事を互いに楽しんだり悩み合いながら、目的に向かっていくことが伴走型の支援であると。安全な道を先に渡って「安全だから」といつか後について来てもらうようなことは支援じゃないと思うし、その道を歩んできたという実感が生まれません。アセスメント作成やケース記録など大変な仕事はたくさんあるのですが、そもそも人と人が交わすコミュニケーションにマニュアルはないわけで、さらに、それを福祉の専門家が全部引き受けることもしないでいいわけで、それぞれの「〇〇したい」を地域の人や場所とつながりながら解決していくことが、センターに期待されている部分だと考えています。伴走する人を地域で増やすことを目指しながら、さまざまな声に耳を傾けるのが大切です。

柴崎：その悩みがあることが、支援センターがきちんと相談者の課題に対峙できている証拠だと思います。すぐに解決できなかったり、どこまでやるべきか判断がつかなかったり、疑問が出てくるということは、まだそこに支援センターの実践知がないということ。それはセンターが活動すべき領域で、共に活動する人たちを増やせるチャンスでもあるから、私はそれにワクワクしてしまいます。「センターができていないこと」の発見によって、これまで支援につながらなかった方やご家族につながれるかもしれないのです。

ちなみに、私たちは新たに支援につながった個人や、新

たな福祉施設がどれだけ関わったかを、宮城県の報告の際に具体的な数値で出します。前年までは全くアプローチしてこなかった方や施設が研修に参加していたら、研修の立て方が成功して、新しい仲間や協働者が増えたということだからです。

——活動を手放す、ほかの人に渡していくことについて、そのタイミングなどありますでしょうか。また、NPOの事業のなかで特に重視していることもあれば、教えてください。

樋口：継続できる環境がその地域でできた場合は、その地域の担い手に引き継いでいきたいと考えています。当センターでは、文化施設関係者に対して障害のある人たちが鑑賞や発表できる環境構築のためのワークショップにチャレンジしていますが、それが始められたのは文化施設関係者とのつながりが生まれ、このような活動に対して興味がある人と出会ったからです。そういったキーマンと一緒に企画を考えることが重要なこと。FACTでは、アートサポーター養成講座や現場体験ワークショップなどの研修会にも力を入れていますが、毎回僕たちには裏テーマがあり、その地域で今後も一緒に活動をできる人を見つけるということなんです。いずれは福岡県内の4地区にハブ的な団体できて、相互につながりながら各地区でより良いサポートができればいいなと思っています。

柴崎：社会の動きを読みながら活動することも大事だと思います。我々の法人は支援センター事業以外にもさまざまな事業を行っていて、それが支援センター事業に活かせることも多いからです。身近な地域社会で、今、何が問題で誰が苦しんでいるのか。そこに福祉や文化のNPOができることは何かを考えて行動すること。また活動のなかで、課題が一旦落ち着いたときにその事業を縮小するか、別の課題に取り組むかを考える、それが大切だと思います。



## 2. ソーシャルデザインによる 支援の仕組みづくりを学ぶ

ソーシャルデザインを専門に活動するグラフィックデザイナー／東京工芸大学デザイン学科教授の福島治氏をゲストに迎え、障害のあるアーティストの表現との出会いから、これまでに手がけたさまざまなプロジェクトについてうかがいました。

[2022年10月5日（水）、オンラインにて実施、19名参加]

### 講師



ふくしま おさむ  
**福島 治**（グラフィックデザイナー／東京工芸大学デザイン学科教授）

1958年広島生まれ。日本デザイナー学院広島校卒業。浅葉克己デザイン室、KDKを経て1999年福島デザイン設立。被災地支援プロジェクト「unicef 祈りのツリー」「JAGDA やさしいハンカチ」「おいしい東北パッケージデザイン展」などデザインにおける社会貢献の可能性を探求、実践する。世界ポスタートリエンナーレトヤマ・グランプリ、メキシコ国際ポスタービエンナーレ第1位、カンヌ広告フェスティバル金賞、2021年度には「障害者の生涯学習支援活動」に係る文部科学大臣表彰受賞。など国内外の30以上の賞を受賞。AGI、JAGDA、TDC 会員。東京工芸大学デザイン学科教授、日本デザイナー学院顧問、公益財団法人みらい RITA 理事、一般財団法人森から海へ理事。

### 概要

### 創作活動と社会をつなぐ仕組みをデザインする

障害のある人の創作活動と、地域や企業とを結びつけ、さまざまなプロジェクトを実践する福島氏。30年間商業的なデザインに携わったのち、2009年からは、社会をよりよくなる仕組みをつくり可視化する「ソーシャルデザイン」を専門に活動を始めました。その活動の中心に据えているのが、障害のある人々による創作活動と社会をつなぐ仕組みづくりです。福島氏が、障害のあるアーティストたちの創作に出会ったのは2005年。作家や福祉施設と交流を深めるなかで、彼らを取り巻く問題、ひいては社会が抱える

問題が見え、展示会の企画などを通して支援を行ってきました。2018年には仲間とともに株式会社フクフクプラスを立ち上げ、障害のある人々の表現から利益を生み出し、作家本人をはじめ、各所に還元する仕組みのデザインを本格的にスタートさせます。企業を主な対象としたアートレンタルや対話型アート鑑賞の事業のほか、東京2020オリンピック・パラリンピックを契機とした自治体とのプロジェクトなど、「つなぐデザイン」をキーワードに、多岐にわたる活動を展開しています。



「シブヤフォント」は、渋谷区庁舎のサインとしてさまざまな場所に使用。



2020年からスタートした「アートパラ深川おしゃべりな芸術祭」は、2023年には約650点が屋外展示されている（写真は2021年）。

## つながる仕組み、 3つのプロジェクト

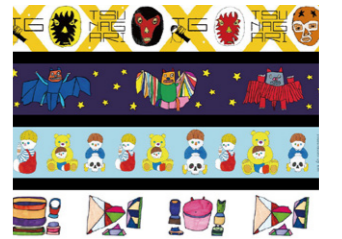


福島さんが研修で紹介した取り組みのなかから3つの事例を紹介。それぞれのプロジェクトに込められた「つながる仕組み」とは？

デザイナーと社会貢献の仕組みを開発

### JAGDA つながりの展示会

日本グラフィックデザイン協会（JAGDA）では、2017年度から4年間、東京2020オリンピック・パラリンピックに向けて、障害のあるアーティストとデザイナーがコラボレーションし、商品開発と販売を通してアーティストとパラリンピアンへの支援を行いました。1年目はマスキングテープを制作。各所に丁寧に企画を説明し、製造業者に原価のみでの制作を承諾してもらいました。販売価格400円のうち半分が原価ですが、残りをアーティストと日本パラリンピアンズ協会へ、100円ずつ寄付。普段サポートを受ける側であるアーティストが、社会貢献できる仕組みをつくりました。

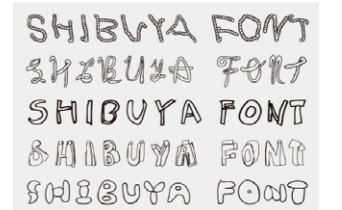


コラボレーションによって生み出されたマスキングテープの絵柄。年間8万個の販売となった。

小さな魅力を集めてオープンフォント化

### シブヤフォント

福祉施設と一緒に「新しい渋谷土産をつくる」というミッションを渋谷区から依頼され、スタートしました。完成度の高い作品はつくれなくても、創作活動が好きの方はたくさんいます。そんな方々の創作活動の可能性を広げ、収入支援につなげたのがこのプロジェクトです。何気なく描かれた絵の一部を拾い上げて、足し算と引き算をしながらデザインし、フォント化。アルファベットを中心に50種類ある「シブヤフォント」は、無料でダウンロードできますが、営利目的で使用する際は有料となり、工賃アップにつながります。データのやりとりなので、施設の方に負担がかからないことも、この仕組みの革新的なところ。



シブヤフォントの一例。

審査を通して仲間になる

### アートパラ深川おしゃべりな芸術祭

まち全体を美術館にすることで、一人でも多くの人が障害のある人の表現と出会う、そのきっかけをつくりたいという思いを長年持ち続けて、ようやく実現したのがこの芸術祭です。人や作品とおしゃべりをしながら楽しめる、対話でつながる芸術祭。名称にはそんな意味を込めています。作品はコンペ形式で全国から公募し、江東区内の神社や庭園、商店街、公共施設などさまざまな場所に展示しています。その審査にも、つながる仕組みがあります。専門家以外にも、芸術祭のパートナー企業の代表に審査に参加してもらい、企業としては「自分自身が心動かされた作品を選んでください」とお願いしています。そうすると、選んだ作品や作家におのずと興味を持ってくれますし、会社の商品パッケージに作品を起用するような動きにもつながっていきます。一個人として審査に参加することで仲間になっていただく、そんな仕組みです。



審査への参加を経て、作品がワインボトルのラベルに起用された例も。

# 3. 舞台芸術や文化施設の鑑賞支援を学ぶ

文化施設における障害のある人を対象とした鑑賞機会拡大の取り組みの事例はまだ多くありません。2022年3月に開催された音楽劇『枇杷の家』では、限られた時間や予算のなか、情報保障などさまざまな試みがなされました。企画に関わった一般社団法人ベンチの藤原顕太氏にお話をうかがい、鑑賞支援のための取り組みについて考えます。

[2022年11月9日(水)、オンラインにて実施、20名参加]

## 講師



ふじわらけんた  
藤原顕太 (一般社団法人ベンチ)

舞台芸術制作者、社会福祉士。日本社会事業大学卒業後に舞台芸術界に入り、舞台芸術制作者に向けた中間支援の仕事に就く。2017年より福祉と芸術に関わる仕事を始め、障害のある人の芸術活動支援に携わる。2021年、アートマネージャーによるコレクティブ「一般社団法人ベンチ」を設立し、理事に就任。埼玉県東松山市の高齢者福祉施設にアーティストが滞在するプロジェクト「クロスプレイ東松山」や、アクセシビリティ・コーディネートなどの事業を行っている。NPO法人 Explat 副理事長。

## 概要

### 鑑賞者側と企画者側の橋渡しをする

藤原顕太氏は、演劇やダンス、アートプロジェクトのプロデュースやコーディネートに関わる舞台芸術制作者を中心に発足したコレクティブ、一般社団法人ベンチのメンバーとして、福祉施設でのアーティスト・イン・レジデンスや、アクセシビリティのコーディネートなど、障害がある人の芸術文化支援事業に携わっています。研修ではまず、指南書として『障害者の舞台芸術鑑賞サービス入門 人と社会をデザインでつなぐ』(南部充央、2019年、NTT出版)を紹介。舞台芸術分野の鑑賞体験における支援について、「言葉がわからない」「会場まで行けない」「参加方法がわからない」などの鑑賞者側のアクセスにおけるハードルと、「どんな人が地域にいるのかわからない」「何が鑑賞支援になるのかわからない」「広報すべき先がわからない」など、多様な鑑賞者を想定するうえでの企画者側のハードルの両方があること、支援センターには双方への支援を通して、互いの橋渡しをする役割があることを話しました。そのうえで、音楽劇『枇杷の家』での取り組みを紹介(p.33)。現状ではハード面の整備や人的資源が十分でない文化施設がほとんどですが、ソフト面でできることも多くあり、情報提

供や技術的なアシスト、人的ネットワークの紹介、モデル事業の提示などは、支援センターが担える可能性も提示されました。課題としては「一つの事業で、まだ出会っていないすべての人を対象にすることは困難」「資金や人員の問題など現実的なハードルもある」とされ、「事業ごとに目的と対象を見定めて適切な支援を検討する」重要性が指摘されました。そして「なによりできるぶんだけやること、できることから始めること」が鑑賞支援に大事であると話しました。東松山市民文化センター「枇杷の家」企画・制作を担当している鈴木和幸さんも一部登壇しました。



右手前にいるのが、舞台手話通訳者。

© 佐藤智

## 音楽劇『枇杷の家』の鑑賞支援

2022年3月に公演された音楽劇

『枇杷の家』(東松山市民文化センター企画・制作)。

どのような鑑賞支援で、行う際のポイントとは。



### Background

#### なぜ鑑賞支援に力を入れたのか?

『枇杷の家』は、東松山市民文化センター企画・制作の、市民参加をコンセプトとした舞台芸術によるまちづくりのプロジェクトです。戯曲の公募から始まり、朗読劇→演劇→音楽劇と発展する3年間(コロナ禍により2年延長)継続する事業として計画されました。アクセシビリティ向上への意欲をもつ演出家、瀬戸山美咲さんの存在を大きなきっかけとして鑑賞支援の取り組みを行うことになり、ベンチに相談がありました。予算も時間も限られたなか、できることを模索し、以下の取り組みが実現しました。

### Accessibility Details

#### 『枇杷の家』の情報保障とアクセシビリティ

##### ■ 公演前 | 舞台説明

公演前の舞台を使い、視覚障害がある人に向けた解説を、演出の瀬戸山さんから観客全員に向けて行いました。物語の舞台設定や舞台美術の構成について、どこに何があるか、実際にその位置に立って説明し、出演者や登場人物も紹介しました。

##### ■ 公演中 | 手話通訳

公演中、舞台袖に手話通訳者が立ち、リアルタイムで通訳を行いました。通常の手話通訳と舞台手話通訳は専門性も異なるため、専門家であるシアター・アクセシビリティ・ネットワーク(TA-net)に依頼しました。本作ならではの単語や歌の手話表現などもあり、舞台作品の手話通訳は、通訳者が稽古に立ち会いながらつくりまわります。舞台説明の際には、各人物を手話通訳で表すときに用いるサインネームを瀬戸山さんとともに説明しました。

##### ■ 公演中 | ライブ音声ガイド

音声ガイドはベンチで制作しました。稽古を確認しながら、通常の台本を再構成した音声ガイド用台本を用意し、FMラジオの送受信機をレンタルして会場内に配信しました。

##### ■ そのほか

補助犬同伴の鑑賞や、車いす席の利用を可能にしたほか、障害福祉サービス事業や特別支援学校などへの広報も積極的に行いました。

### Feedback

#### 来場者の声

計761人の入場者数のうち、視覚障害のある方6名、聴覚障害のある方6名、知的障害のある方8名が来場されました。アンケートには、「舞台の手話通訳を初めて見たが、ストーリーがほぼすべてわかって感動した」「歌の表現が良かった。心が伝わる手話だった」「丁寧な説明のおかげで舞台セットが頭にすんなり入り、作品の進行が理解できた」といった感想が寄せられました。



音楽劇「枇杷の家」公演チラシ。



舞台説明の様子。演出家の瀬戸山美咲さんが舞台上にあるものをその場で説明。移動するときには声に出して歩数を数えた。 © 佐藤智

## REVIEW

## 研修を振り返って

各研修の感想を、参加者アンケートより一部抜粋して紹介。他ブロックからの参加もありました。

## 1. 支援センターによる中間支援の取り組みを学ぶ (p.26-29)

柴崎さんの話されていた、福祉施設に所属されていない方の活動実態を知り、そこから支援のニーズも浮かび上がってきたというのがとても重要なことだなと感じ、印象に残っている。樋口さんの、障害のある方のサポートを専門家がやるからできる、ではなく自分ごととしてみんなが捉えられるようになることが大切というお話も印象に残っている。「できないことを公にしていこう」という視点を、今後活動を進める上で参考にさせていただきたいと思う。(ブロック内支援センター職員)

市民団体関係者や県だけでなく、政令指定都市も参加する協力委員会の設置によってネットワークを構築し、協働を進めていることについて参考になった。(ブロック内自治体職員)

自治体として計画や制度に注視することが多いが、実際の現場の意見は大変貴重だと感じた。(ブロック内自治体職員)

私どもは県とのつながりはあるが、自治体や他文化施設等との連携はできておらず、中間支援業務として、つなぎ役としての方向性があり、目指していくことを検討したい。(他ブロック支援センター職員)

お二人共アプローチは異なるけれども、根っこ、芯となる考え方は同じなのだということを感じられて面白かったです。地域によって様々な状況がある中で、この芯の部分共有していくことはとてもいいなと思いました。(他ブロック支援センター職員)

いつも他府県の様子を聞くと焦ったりするのですが、結局は地道にするしかない、というのを聞いてホッとしました。(他ブロック支援センター職員)

## 2. ソーシャルデザインによる支援の仕組みづくりを学ぶ (p.30-31)

芸術活動をコミュニケーションツールとして、障害のある人と地域などが出会い、つながることで、「障害のある人」という単一の枠ではない、どんな人間もそうであるように、多面性をもつ個人として普遍的にとらえてもらい、個々の特性を活かしていけるようなアプローチや仕組みづくり、場づくりを、支援センターとして今後も考え取り組んでいきたいと感じた。「福祉の押し売りになってはいけない」という部分がとても印象に残った。(ブロック内支援センター職員)

「福祉関係者の中だけでモノを作り販路を開拓することは難しい」ということをまず認識されていない関係者が多く、狭い範囲で活動する事業所が多い。デザイン(専門家)の力を借りれば社会とつながる商品作りが可能であるということを説明するにあたっての考え方を伝えていただけた

回でした。デザインが可視化だけでなく、仕組みを作る役割もあることを改めて知りました。仕組みとして企業や多くの一般人が関わることで、一過性・一回きりのことではなく、継続的に作家の社会参加、還元につながる事業にできることを学びました。(ブロック内支援センター職員)

普段は支援を受けている障害者アーティストがデザインの方で社会貢献ができる仕組みを構築されていることにも感銘を受けました。(ブロック内自治体職員)

「おしゃれ=デザイン」、という漠然とした考え方をしていたが、「デザインは福祉・社会・市民をつなぐもの、生きていくための知恵」という言葉が強く印象に残った。(他ブロック支援センター職員)

## 3. 舞台芸術や文化施設の鑑賞支援を学ぶ (p.32-33)

舞台上の手話通訳者が単に完成された舞台に添加された存在として取り扱われたのではなく、その作品自体に組み込まれた存在となっており、通訳者を含めて1つの作品となっていたことが印象に残った。鑑賞支援に関する様々な支援ニーズに対応することは支援センターの役割の1つになりうるが、同時に文化施設を持つ自治体としても積極的に取り組んでいかなければならないことであると感じた。(ブロック内自治体職員)

「鑑賞支援事業が行政・サービスのアライバイトになってはいけない」という言葉が印象に残りました。行政側でも様々なイベントを行い、障害者の方も楽しめるように手話通訳者と呼んだり、ヒアリンググループを設置した

りするが、そこで満足してしまい、振り返りをしない傾向があるので、そのサービスは本当に必要だったか、改善の必要はあるかなどを考えながら実施していきたい。制約がある中で、いかに障害のある人もない人も楽しめるイベントづくりをするか、とても参考になりました。設備のせいにしてあきらめるのは簡単ですが、施設側と課題をひとつひとつ洗い出し、解決に向け話し合う重要性を今回の研修で学びました。(ブロック内自治体職員)

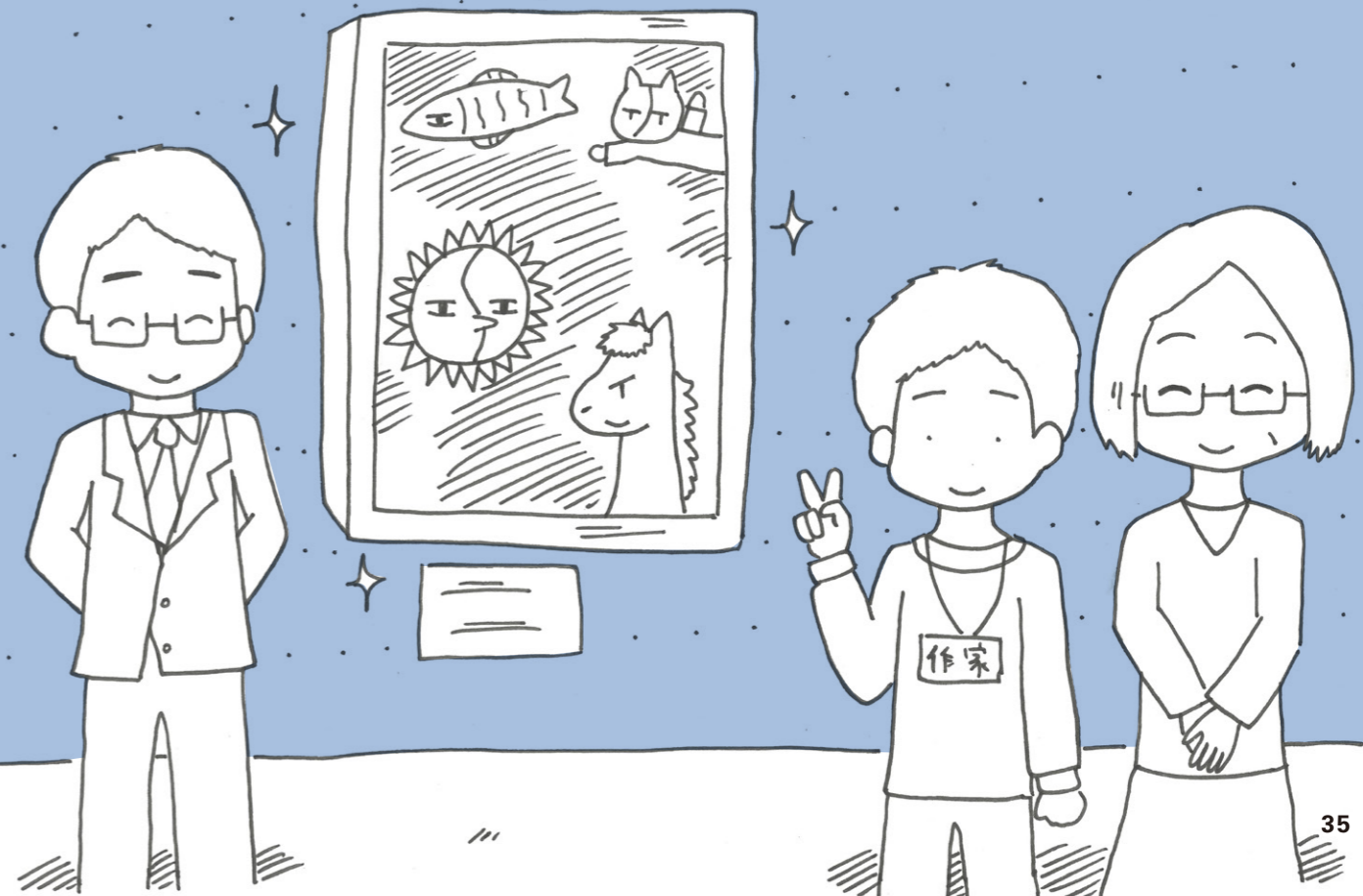
合理的配慮研修を事業として行っていますが、今後どう展開していこうか悩んでいたところだったので、参考になりました。(他ブロック支援センター職員)

# Part 3

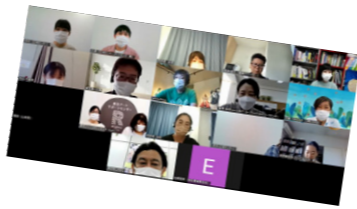
## MEETING

# 意見交換会

広域センターや支援センター、自治体の担当者との交流や対話の場として、自治体による事例報告、相談支援、合同企画展などの各トピックについて意見交換会を行いました。今年度は対面での実施も実現しています。



# 1. 各自治体が福祉と芸術の状況と事例を紹介しました



本事業を進めるうえで欠かせないのが、支援センターと自治体の連携です。東京都、山梨県、千葉県、埼玉県の自治体職員より、基本計画の策定状況と事業内容について紹介してもらいました。

[2022年8月2日(火)、オンラインにて実施、21名参加]

## 東京都 体験を通じて触れ合い、互いに理解し合う場の創出

東京都では、芸術基盤の事業のほかに、主に3つの障害者の芸術文化事業を実施しています。一つ目は「東京都障害者総合美術展」という公募展です。日本チャリティ協会と協力し、1986年から毎年開催しています。2022年度も西武池袋本店の催事場にて平面作品や立体作品等を展示しました(7月15日～19日)。約200点展示し、そのなかから優秀な作品20点を表彰しています。障害者の芸術文化活動への参加と才能の発掘・育成という目的で行っています。

二つ目は「障害者のためのふれあいコンサート」です。日頃から本格的なオーケストラを鑑賞する機会が少ない方々をコンサートに招き、生の芸術に接する機会を設けることを目的に行っています。1985年から毎年

実施しており、2年ほどコロナ禍で中止になっていますが、2022年度は2023年2月頃を予定に行います。こちらも日本チャリティ協会、東京交響楽団などと協力して行っています。

3つ目の「ふれあいフェスティバル」は、障害のある人となない人が同じ体験を通じて触れ合い、互いに理解し合う場を設ける、障害および障害のある人について理解を深める目的で行っています。2019年以降は中止していましたが、2022年度は12月5日に開催しました。パラリンピックメダリストのトークショー、ダンスや和太鼓のパフォーマンス、特別支援学校の生徒による演奏などを行いました。

阿部武志(東京都福祉保健局障害者施策推進部計画課)

## 山梨県 文化芸術活動を通じて、地域交流を促進

山梨県では、2021年に「やまなし障害児・障害者プラン2021」が策定され、障害者文化芸術活動の計画が記載されています。そこでは、大きく分けて3つの課題があります。一つ目はコロナの影響による出展作品数、出演団体数の減少。二つ目に作品の周知、活用が不十分であること。3つ目に、共生社会に対する認知度の低さです。これらの課題に対応する形で、基本的理念が3つあります。「全ての人が文化芸術活動に参加できる環境の整備」「芸術上価値の高い作品の支援をすること」「文化芸術活動を通じた地域との交流を促進すること」です。

この基本的理念に伴い、当計画では「楽しむ」「支える」「深める」という方向性を定めています。「楽しむ」では県内から作品を公募し展示する「障害者文化展」を多くの方が楽しめるよう地域展と総合展に分けて

開催しているほか、ステージ発表や物品販売等を行う「障害者芸術・文化祭」や先進的な舞台発表団体を招へいた鑑賞会を開催しています。「支える」では、YAN山梨アール・ブリュットネットワークセンターに委託し、相談支援や研修会の開催、関係者によるネットワークの構築等、支援のための人や場づくりを行っています。最後に「深める」では「いえなか美術館」と題し、障害のある方の作品を公共施設やカフェ等に月に2週間、5～20点ほど展示しています。これは障害者文化展に出展した人の先の活動にもつながっています。そのほか2022年7月には障害のある方がモデルとなった「ユニバーサルファッションショー」を実施するなど新たな取り組みも始まりました。

横森穂菜美(山梨県福祉保健部障害福祉課)

## 千葉県 あらゆる人が文化芸術に親しむことができる環境づくり

千葉県では2020年度に「千葉県障害者文化芸術活動推進計画」を策定しています。またこれに加えて、2021年度末に、文化芸術に関する新しい計画「千葉県文化芸術推進基本計画」を策定し、あらゆる人々が文化芸術に親しむことができる環境づくりを柱の一つに掲げています。そこで障害の有無や年齢等に関わらず、あらゆる県民が文化芸術活動に参加でき、鑑賞できる機会の提供や支援を行うとしています。

これらの計画をふまえ、2022年度は公募展「千葉県身体障害者作品展」(千葉県立美術館、10月18日～23日)を開催しました。書、絵画、手工芸、写真の4部門を設けて、県内の事業所等で趣味やサークルとして活動を行う方たちから作品を募集しました。約110点を展示し、優秀

作品には千葉県知事賞など各賞を授与しています。このほか、障害のある人となない人が同じ場所で活動を行う場を提供しています。

支援センターとの連携としては、障害者芸術活動推進事業はまだ実績が浅く、他県の取り組みを参考にしながら、より連携して取り組んでいきたいと思っています。千葉県では2022年より本事業が文化振興課に移管されました。これまでの障害者の文化芸術活動を支援する取り組みとあわせて、障害のある人もそうでない人も一体となって文化芸術活動を行える機会を創出していくことで、県全体の文化振興を図ってきたいと考えています。

杉山明日香(千葉県環境生活部スポーツ・文化局文化振興課)

## 埼玉県 障害者による芸術文化活動の魅力発信と裾野の拡大

埼玉県では、障害者の芸術文化活動について「埼玉県文化芸術振興計画」と「埼玉県障害者支援計画」の両方に規定しています。文化芸術振興計画では、文化資源を活かした地域振興や、心豊かで活力ある県民生活を実現するために、障害者支援計画では、障害の有無を問わず人々が互いに理解し合い、皆が活躍できる共生社会を実現するために、それぞれの計画において、障害者の芸術文化活動を推進する必要があると考えています。両計画に共通して定めていることとして、「障害者アートの魅力発信」と「芸術文化活動の裾野拡大」という二つの方針があります。

「障害者アートの魅力発信」は、障害を乗り越えて頑張ったというプロセスではなく、作品そのものの魅力を評価する取り組みであり、障害者アートの展示や鑑賞の機会を増やし、多くの方に障害者アートの魅力

に触れていただくことにより、障害者に対する理解を深めていただくことを目的としています。

「芸術文化活動の裾野拡大」は、身近な地域で芸術文化活動に取り組む障害者とその支援者を増やす取り組みであり、障害者も参加しやすい芸術ワークショップを実施するなど、障害者が芸術文化活動に親しみ、楽しむことから始めて、やがては芸術文化活動を通じて自己を表現し、社会とつながる機会とすることを目的としています。

二つの方針にもとづき、埼玉県では2009年度から「埼玉県障害者アートフェスティバル」を開催し、2022年度で13回目を迎えました。毎年度「美術部門」「舞台芸術部門」「芸術文化の体験」の3つのカテゴリーにもとづき、1年を通じて多彩なイベントを実施しています。

小澤圭佑(埼玉県福祉部障害者福祉推進課)

SAITAMA'S CASE

## 埼玉県の「主な事業」を紹介!

### 美術部門

- 障害者アート企画展(障害者アートを選考により展示する本格的な美術展)
- 障害者アート魅力発信事業(公共施設等への障害者アートの展示や障害者アートの利活用の取り組み)
- 障害者アートオンライン美術館(魅力あふれる障害者アートをオンラインで楽しめるウェブ美術館)
- 障害者絵画展(選考なしに会場のキャパシティの許す限りすべての作品を展示する絵画展)
- 各種イベントにて障害者アートを展示(県内の大規模イベント等で障害者アートを展示)

### 舞台芸術部門

- 障害者ダンスチーム「ハンドルズ」公演(一流のダンサー・振付師であり、彩の国さいたま芸術劇場の芸術監督でもある近藤良平氏が演出する、障害者ダンスチーム「ハンドルズ」による情熱あふれるダンス公演)
- バリアフリーコンサート(障害のある人もない人も一緒に、質の高い音楽を気軽に楽しめるコンサート)

### 芸術文化の体験

- 音楽ワークショップ(打楽器・スティールパン)(障害のある方も気軽に楽しめるワークショップや音楽に親しむ機会の提供)
- ダンスワークショップ(テーマに合わせて心のおもむくままに表現したり、音楽に合わせて踊ったりして身体を動かす楽しさを体験するワークショップ)

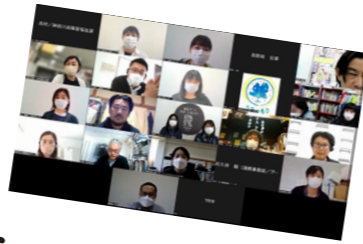
## Comment

### 藤原顕太さん 広域センター事業アドバイザー



行政と支援センターの間において、対等なコミュニケーションが成立する関係を構築することは非常に重要です。本会で、ブロック内の自治体担当者と支援センターの担当者が集まり、率直な意見交換を行える機会ができたことは貴重な場となりました。支援センターから提示のあった、事業規模や人員、予算などの課題については、今後も意見交換を図る場ができると望ましいように感じました。

## 2. 支援センターにおける 相談支援の現状を聞きました



障害者芸術文化活動普及支援事業のなかで、支援センターの役割の一つが相談支援事業です。当事者やその家族、多分野の専門家など多くの人と関わりながら「芸術文化活動に関するさまざまな悩みを共有しながら支援していく」ことを目指しています。当ブロックでは支援センター同士の連携を強め、相談内容や対応事例などを共有することで、ブロック全体でさまざまな相談に対応できる体制を整えていきます。ここでは、各支援センターの状況と、意見交換会での質問やコメントも掲載しています。  
[2022年6月8日(水)、オンラインにて実施、24名参加]

### 東京アートサポートセンター Rights (ライツ)



まつまきようこ  
松山 恭子

クラウドのデータベースを使用し、相談内容をスタッフ間で共有しながら対応しています。相談者は障害当事者や家族が多く、無料法律相談や弁護士の対応が必要な相談は施設からのものが多いです。そのほか企業やアートイベントの主催者からの問い合わせや、当事者による音楽や演劇などの相談も増えてきています。

質問：相談が集中している地域はある？

どこかに集中している印象はありませんが、以前広域センターを担っていた期間もあり、都外からの相談もあります。また2021年度は八王子地域で事業を行い、当センターの周知にも努めたため、八王子周辺からの相談も増えました。都外からの相談については、その県の支援センターと連携しながら対応しています。

### 千葉アール・ブリュットセンター うみのもり



こまちだたまお

相談件数は社会福祉法人フラットが運営していた2年前からあまり変わらず少ない印象です。千葉県はアートに興味のある個人の方は東京で学んでいる場合が多いということや、周知が足りていないことなどが原因として挙げられます。相談内容は、画材などの技術的な質問、展示方法、販売ルートなどの相談が多いです。昨年度は、オンライン相談会を2回実施し、施設の講師や当事者が参加しました。当事者の方はアートと出会ってどのような変化があったかお話をうかがい、画面越しでも深いところまで話すことができました。

質問：他団体と連携して運営されているが、どのようにネットワークを活用して対応しているか？

例えば、フラットが運営していた頃から相談されている精神障害のある当事者の方は、定期的に連絡があり、体調など含めて情報を共有しています。フラットを利用したことのある方から相談があったときも、協力して体制を整えました。

### 神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター



かわむらみさ  
川村美紗

相談窓口の紹介を中心にパンフレットを作成し、配布しています。相談対応はメールと電話が中心ですが、ウェブ上で問い合わせフォームも設けています。データ管理にはエクセルを使用しています。相談者は、当事者と障害福祉関係者が同等で最も多い印象です。事業報告書を見た方からの相談もありました。

質問：支援センター開設前と比べ、相談内容の変化は？  
また相談について苦労する点は？

開設以前は福祉施設や文化施設からの相談が多かったのですが、開設後は障害当事者からの相談が増えました。相談内容が通所先のことになることと専門性がありませんので、その場合は地域で相談支援を行う障害福祉サービス事業所に問い合わせるなどで対応しています。

### YAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンター



にったちえ  
新田千枝

相談者として一番多いのは、福祉関係の事業所や企業です。作品の使用についての相談が増えています。相談件数はあまり多くありませんが、相談に対して一歩踏み込んで、丁寧な対応をポリシーにしています。山梨と神奈川の県境の方からお子さんの作品を NFT アートに出品することについて相談があった際、NFT アートについて詳しくなかったため、広域センターや神奈川県の支援センターに相談し対応することができました。東京アートサポートセンター Rights (ライツ) からも困ったことがあれば無料法律相談もあると案内いただきました。

### ART(s) さいほく

ART(s)さいほく

いしだいらゆういち  
石平裕一

相談件数はまだ多くありませんが、障害当事者や家族からの相談が多いです。以前、市町村の作品展をサポートしたときに、担当者が「こういうことも相談しているんですね」と話されていました。今後はどのような相談に対応しているのかを周知する必要があると考えています。相談支援センターや社会福祉協議会などに足を運び事例を発表しながら、相談件数を増やしていけたらと思います。

広域より：埼玉県の場合、自治体がアートセンター集と ART(s) さいほくの両者に相談案件を送付するため、三者が連携して相談に対応していますよね。

連携することが解決の糸口になっていますね。埼玉県障害者アートネットワーク TAMAP 土〇もさまざまなアイデアを持っていますので、助けられています。

SAITAMA'S  
CASE

## 埼玉県・アートセンター集に寄せられる、相談内容や対応事例

### 相談窓口

埼玉県障害者芸術文化活動支援センター アートセンター集

場所： 埼玉県川口市木曾呂1445 工房集内

開設年： 2016年(本事業のモデル事業により)

体制： 職員3名(法人での福祉業務等と兼務)

※法人でのバックアップ体制あり(相談支援センターなど)

※工房集内で共有し対応方法を議論。担当者だけでなくチームで取り組む。

受付時間：平日10:00-17:00

対応方法：電話(工房集と共通)、SNS(Facebook、Instagramのダイレクトメッセージ)、メール、面談

### 対応事例

#### 作品を見てほしい

➔ 工房集に直接作品を持ってきていただく。メールなどで定期的に連絡を取り合う場合も。

#### 作品を発表したい

➔ 県や各施設の催しなどの情報を提供し、特に埼玉県内の方は「障害のある方の表現活動状況調査」\*を紹介。  
\*埼玉県が毎年実施している調査。「埼玉県障害者アート企画展」の選考にもつながる。

#### 作品のグッズ化など二次使用してほしい

➔ 中間支援団体を知りたい方にはエイブルアートカンパニー、障害者アート協会などを紹介。

#### 他人が撮影した写真を見て描いた絵を商品化してよいか

➔ 模写や創作の程度により著作権侵害になる可能性があるため、まず承諾を得る必要があるか内容を精査するようアドバイス。

#### 施設利用者の作品の価格設定について知りたい

➔ ネットワーク参加団体からの相談。連携先のアートディレクターに相談し、ネットワーク内でレクチャーを実施。

#### 障害のある作家の作品を事業に活用したい

➔ 県営競技事務所からの相談。埼玉県障害者アートネットワーク TAMAP 土〇で共有し、作家を募り選出。競輪を題材に描いた作品から1点が選ばれブリベイドカードに使用された。

※運営団体である社会福祉法人みぬま福祉会・工房集では、以前よりさまざまな相談に対応しており、アートセンター集設立後も共通の窓口で対応。

### Comment

各支援センターの実施団体の専門性により、寄せられる相談が異なる場合があり、また一つの支援センターで対応が困難なときもブロック内の支援センターと連携することで解決につながることもあります。件数の集計だけでなく、個々の案件のやりとりの回数や、どのように対応をしているか、相談内容の傾向などを精査するのも大切ですね。今後もブロック内で状況を共有することが必要だと感じました。

中村亮子 広域センター担当者



### 3. 合同企画展「カウンターポイント—それぞれの寄り添うかたち—」 についてブロック会議で話し合いました

2021年度に開催した合同企画展「ドキュメントとしての表現」では、相談支援の延長として展覧会を開催しました。2022年度のテーマは、支援者の「寄り添い」です。各都県の支援センターをはじめ、当事者の家族、福祉施設や創作の場が障害のある人にどのように寄り添い、支援してきたか。一つではないそのかたちを、作品展示とともに紹介しました。本展を進めるにあたり各支援センターからはさまざまな意見が寄せられました。

[2022年7月5日(火)、神奈川県内にて実施、25名参加(一部オンライン参加) / 2022年8月2日(火)、オンラインにて開催、21名参加]



今回はセンターのみなさんの推薦作家ということで、なぜその作家さんを推薦したかったのがテーマになると思う。最初は私が作品を選ぶのかなと思っていたが、ジャッジできない。というよりもしない方が良い。地域の状況を反映していると思ったので、全員の作品を展示して背景も含めてしっかり見せると、このブロックの障害、アート、地域、福祉の関係性がそれぞれの形で浮かびあがり、全体で共通のイメージとして見えてくる。

中津川浩章(監修者)



桑原さんを紹介した時点では、センターと作家さんの関係に焦点を当てる案は固まっていなかったと思うので、現在のライツと作者との関係性でいうと、「寄り添う」とは少しズレがあるように感じる。センターと作者だけでなく、作者と支援者、家族との寄り添いも含めたコンセプトになっていくのであれば、作者が初期メンバーとして、現在も制作をしている絵画クラブでは、代表の平岡さんが15年間寄り添い、お母さまもその活動をずっと支援してきた点で合うと思うがどうか。

村上あすか(ライツ)

長野のセンターは6月に立ち上がったばかりで、このテーマだとまだセンターとして寄り添って支援をしている方たちが少ない。今までザワメキアート展という展覧会の事務局だったのですが、その入選者の方たちの作品をご紹介しようと思っていたので、このセンターとして寄り添っていくというような形で作家さんを紹介すると、なかなか悩ましい。

持田めぐみ(ザワメキ)



それぞれの支援センターがどういった活動をしているかを紹介する点では、どのような関わりをどんな方々としているのかを展覧会を通じて見えてくると思うので、個人と支援センターということだけではなくと思う。中津川さんがおっしゃっていたように地域性やそれぞれの特徴もご紹介頂いている作家さんから出てくるのではないかと。

中村亮子(広域)

寄り添う、支援の在り方も含めて普及支援事業の支援センターそのものを合同展で紹介するのは良いと思った。それぞれの支援センターが地域で丁寧に向き合っているというのは今日の話でも充分伝わってくる。それがまた展覧会という場でどうなるか、とても楽しみ。美術の作品だけじゃない表現もあることでテーマの広がり期待できる。広域センターのブロック会議を通して、支援センターのみなさんが合同展としてプロセスも共有して作っている。この場がすでに研修的な機能にもなっていると感じた。

森真理子(厚生労働省)



今年は各センターの活動や関わりが反映できるのが展覧会の特徴で、展覧会までの期間、それがモチベーションになるのではないかと。作家さんを紹介するのはどこもやっているの、関係性に一歩踏み込むのは展覧会としては面白いと思う。

瀧澤聡(YAN)

OUTBACKさんの演劇や金澤さんの人形劇もあり。どういう形で展覧会の中に入れるのが大きなポイントだと思う。実物の美術作品だとそれを媒介にしたコミュニケーションが生まれやすいが、演劇をどう展示することができるのか。

藤原顕太(事業アドバイザー)



寄り添うかたちだからプロセスを見せることが大切。ワークショップの風景を動画にしたり、テキスト化したり、可視化する。精神障害もそれぞれ違うので、特性や背景が見えてくると、だからこの演劇なのか、ということが見えてくる。展覧会は美術というスキームだが演劇なども実際パフォーマンスは難しいので、プロセスをみせたい。実際のステージでは結果がすべてなので、逆にここでしか見えないプロセス(寄り添うかたち)を見せると良い。

中津川浩章(監修者)

discussion

#### 身体表現はどう展示する?



寄り添うかたちという言葉が出て、合同展の向かう方向がわかりやすくなった。埼玉の金澤さんと神奈川のOUTBACKさんの展示はどうなるのかなと思った。東京芸術劇場という場所で、実際に演じているところを観ることができると良いと思う。二つの展示会場の間の広場でできると観客を巻き込んで良いのではと思った。

松山恭子(ライツ)

支援センター同士の協働を表す言葉として、音楽の技法の一つで「カウンターポイント」(対位法)という言葉と出会った。複数の旋律をそれぞれの独立性を保ちつつ、互いによく調和させて重ね合わせる方法ということで、美術にとらわれずいろいろなキーワードを含めることができると思い選んだ。

中村亮子(広域)



discussion

#### 「カウンターポイント」 というタイトルについて



「カウンター」という言葉にカウンターカルチャーとかそういうイメージがあったのでなんだろうと思ったが、「寄り添うかたち」という最初のタイトルにも共通することが含まれているということがわかったので良いと思う。

川村美紗(神奈川支援)



僕はキーワードというところで、「寄り添うかたち」や「間柄」について想像していて、一緒にそれぞれの思いをこうやりながら、だんだん混ざっていくというところでは「カウンターポイント」というタイトルはすごく合っていると思った。ただ馴染みがないという感じかと思うが、テーマ的には合っていると思う。

石平裕一(さいほく)

私も初めてうかがったので……でもあの意味をうかがって自分なりに調べて、展覧会のタイトルとしてはよろしいかと思う。あとはデザイナーの方にプレッシャー与えてしまいが、デザインでどういうふうこれを示していくかだと思う。

こまちだたまお(うみのもり)

Comment

小嶋芳維 広域センター担当者



南関東・甲信ブロックでは「みんなで考える」を合言葉に事業を進めています。展覧会コンセプトの検討から始まった意見交換会では、各都県の支援センターからさまざまな意見が寄せられました。これらの意見を集約し、本展のタイトルは「カウンターポイント—それぞれの寄り添うかたち—」と決まりました。またチラシには「地域×福祉×支援×表現」というキャッチコピーを入れることで、美術展としてのインパクトだけでなく、作品の背景にある福祉や地域ネットワークなどの社会的側面も含めたビジュアルとなりました。

## 4. 合同企画展について 振り返りました



2023年1月に開催した「カウンターポイント—それぞれの寄り添うかたち—」について  
それぞれの支援センターが振り返りました。

[2023年2月7日(火)、オンラインにて実施、22名参加]

YAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンター



瀧澤 聡

たくさんの支援センターと作家との関わりには多くの学びがありました。私たちは作家さんと丁寧やりとりすることを大事にしていますが、ほかのセンターのみなさんも同じだと思いました。せっかくなので、もう少し交流の時間があれば良かったです。

ザワメキサポートセンター



持田めぐみ

出展作家のお二人はとても喜んでいました。作家・尾澤さんのお母さんは「自己肯定感が低いタイプの子だけど、こうやって紹介されることで自分に自信がついてきている。生活が前向きになっている」とお話しされていました。展示の準備段階では、出展者に説明する企画書や謝金について、また会場での人形劇などの表現方法も参考になりました。

アートセンター集



小嶋芳維

普及支援事業という枠組みのなかでいろいろな支援があることが可視化され、学びが多くありました。東京都や神奈川県が行っている、特徴的な活動に取り組む団体への支援や、長野県のように子どもへの教育面での支援についても、これまで私たちがあまりやってこなかったのが参考にしたと思います。今後も埼玉の支援センターとしてより良い支援を考えていきます。

ART(s) さいほく



石平裕一

展示パネルの内容も読み、舞台など埼玉にはない作品も多く勉強になりました。作家の金澤さんにとって、自分で電車に乗って会場の池袋に行くのも挑戦でしたが、設営も楽しんでいました。事前に上演動画を撮影し、会場で放映できたのも良かったと思います。金澤さんは、創作の場として地域の交流センターを借りていたようで、今回のやりとりを通じて、こうした地域のなかの良い関係を知ることができました。展示では支援センターの事業を知ってもらうことも課題なので、参加型の研修会などをやっても良かったかと思えます。

千葉アール・ブリュットセンター うみのもり



こまちだたまお

展示の現場ではほかの支援センターのみなさんが、普段から作品とどのように対峙されているのかがわかりました。千葉から出展した山本さんは、展示を終えてさらにやる気を見せています。表現者が中心となって福祉に関わっているのがうみのもりの特徴です。長く美術に関わっている人が障害者の創作活動に出会い、魅力を感じて関わり始めていると感じています。

東京アートサポートセンター Rights (ライツ)



松山恭子

設営に参加して、YAN やうみのもりから作家さんのことを詳しくお聞きし、とても参考になりました。今回出展された作家さんとは所属している団体を通じた関係になりますが、スケジュール変更が苦手な当事者の方もいて、アーティストトークの中止について対応に困られた団体もあったようです。また今回は展示の専門業者を入れなかったということですが、複数の支援センターが設営に参加していたので、逆に専門業者を入れることで設営を支援センターの学びの場にもよかったのでは、と思いました。

神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター



川村美紗

展示を見に行った OUTBACK のメンバーは、作家・金澤さんの人形劇に興味をもっていたようです。ほかの作品を見ることができたのもよかったと思います。また、各支援センターが、作家さんと伴走されていることがよくわかりました。神奈川県内ではすでにたくさんの取り組みがされていることもあり、相談支援のなかでは、発表の機会や創造・体験の機会に関する情報をつないでいます。ほかの支援センターの関わりを見て、相談支援のあり方を考える機会ともなりました。

## Part 4

### EVALUATION

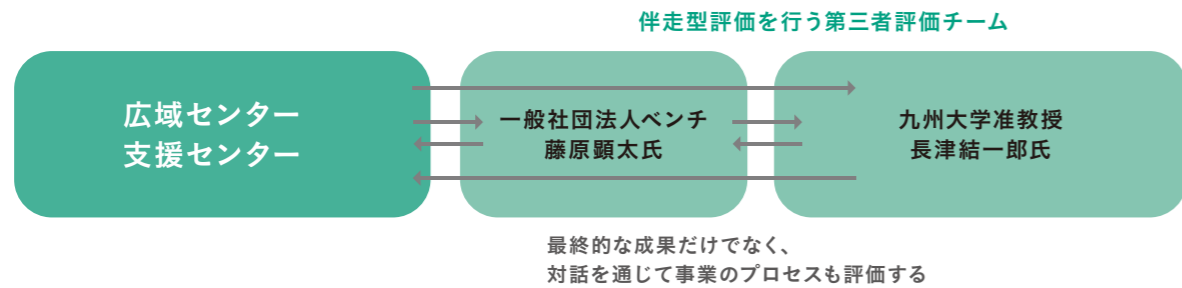
# 事業評価

昨年度に続いてロジックモデルを活用した事業評価を行いました。今年度は厚生労働省による『障害者芸術文化活動普及支援事業評価ガイド—より良い協働と事業成果を高めるためのヒント集—』(2021年)を参考に、専門家の伴走のもと実施しています。



## 評価体制

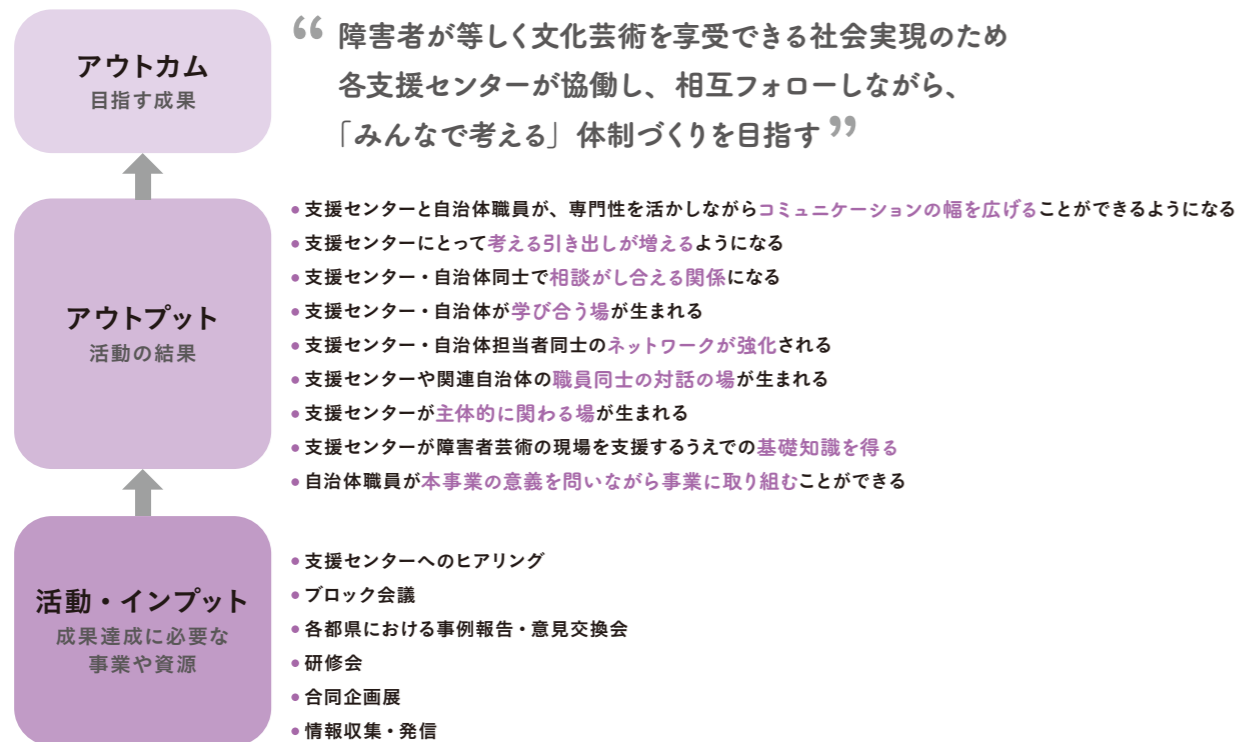
当センターがスタートした2021年度から、事業の指標とプロセスが適正であったかを客観的に振り返るため、第三者による評価チームを設置しています。評価の方法としては「伴走型の評価体制」を採用。事業の最終報告だけを評価するのではなく、当センターに計画段階から振り返りまでを伴走する形で事業のプロセスを把握し、対話しながら評価を進める体制として長津結一郎氏（九州大学准教授）と藤原顕太氏（一般社団法人ベンチ）にご協力いただきました。



## 評価方法

### ——ロジックモデルを活用した目標設定と事業計画

昨年度に制作したロジックモデルを改良する形で今年度に目指したいことを整理し、それにもとづいて評価尺度（下図）を作成。広域支援センターとしての「アウトカム（目指す成果）」は、2021年度に続いて同じものを採用し、それに伴う「アウトプット（活動の結果）」と「活動・インプット（成果達成に必要な事業や資源）」を設定しています。年度末には、支援センター向け・自治体向け・広域センター向けにそれぞれ作成したアンケート調査を行い、ロジックモデルと照らし合わせました。



## 評価のためのアンケート

ロジックモデルによる目標に対していかに達成したかをはかるため、実施したアンケート調査の設問は以下の通りです。

### アンケート項目 ※（ ）内の文言は自治体向けのアンケートで使用

#### アンケートについて

- 2023年1～2月に実施しました。
- アンケートは、支援センター向け（Q1～3、Q5～8）、自治体向け（Q1～2、Q4、Q6～8）、広域センター向け（Q9～12）にそれぞれ作成しています。
- 回答は、支援センター担当者7名、自治体担当者6名、広域センターについては評価チームの会議のなかで一緒に回答しました。
- Q1～6については「非常にそう思う」「ややそう思う」「どちらでもない」「ややそう思わない」「全くそう思わない」の5段階で回答。Q7以降についてはチェックリストを作成し、チェックが付いた数に応じた評価を行いました。

- ご自身の（ご自身の自治体が設置している）支援センターの年度当初の課題はどれくらい解決されたかと思えますか。
- 広域センターや他の支援センターが頼れる存在であると思えますか。
- ご自身の支援センターは、自治体職員と、専門性を活かしながらコミュニケーションの幅を広げていると思えますか。
- 自治体職員が支援センターと、専門性を活かしながらコミュニケーションの幅を広げていると思えますか。
- 広域センターの事業を通じて、支援センターが考える引き出しが増えたと思えますか。
- 他の支援センターと（他の支援センターやブロック内の他の自治体と）お互いに相談をし合える関係にあると思えますか。
- 支援センター・自治体が学び合う場について。
  - 自治体事例報告を通じて自分にとって新たな発見がある
  - 自治体事例報告を通じて自分の所属する組織で実際に参考にしたい方法や考え方がある
  - 自治体事例報告での情報が実際に自分の所属する組織の活動で役に立った
  - ブロック会議を通じて自分にとって新たな発見がある
  - ブロック会議を通じて自分の組織で実際に参考にしたい方法や考え方がある
  - ブロック会議での情報が実際に自分の組織の活動で役に立った
  - 研修会を通じて支援センター（組織）のメンバーに新たな発見がある
  - 研修会を通じて自分の支援センター（組織）で実際に参考にしたい方法や考え方がある
  - 研修会を通じて実際に自分の支援センター（組織）の活動で役に立った
- 支援センター・自治体の担当者同士のネットワークが強化されるための活動について。
  - ブロック会議以外の場でセンター（自治体）同士が連絡を取り合う関係性がある
  - 自分の支援センター（自治体）で他の支援センターの取り組みを参考にした事例がある
  - 他の支援センター（自治体）があつてよかったと感じる
  - 合同企画展に自分の支援センター（自治体）は主体的に参画した
  - 広域センターのウェブサイトで自分の支援センター（自治体）の基礎情報が参照できるようになっている
  - 広域センターのウェブサイトで自分の支援センター（自治体）の実施するイベント等の情報が掲載されている
  - 自分の支援センター（自治体）の情報が広域支援センターを通じて容易に情報発信できる
- 支援センターや関連自治体の職員同士の対話の場が生まれるための活動について。
  - 優れた自治体の実践を報告・共有する機会がある
  - 他の自治体の状況を知るだけでなく質疑応答や対話の場が持たれる
  - ブロック会議において支援センター同士の対話の時間をつくる
  - ブロック会議において自治体職員同士の対話の時間をつくる
  - ブロック会議において支援センターと自治体職員が意見交換できる時間をつくる
- 支援センターが主体的に関わる場が生まれるための活動について。
  - ブロック会議で支援センターが意見を言う場が毎回確保されている
  - 支援センターの意見によりブロック会議の内容が柔軟に変更されている
  - 合同企画展にすべての支援センターが何らかの形で参加している
  - 合同企画展にすべての支援センターが地域の特色を活かした関わり方をしている
- 支援センターが障害者芸術の現場を支援するうえでの基礎知識を得るための活動について。
  - 現場を支援するための体系的な知識を伝達するための基礎資料が収集されている
  - 現場を支援するための体系的な知識を伝達するために適切な講師が選定されている
  - 現場を支援するための体系的な知識を伝達するための教材が作成されている
  - 現場を支援するための体系的な知識を伝達するために適切な講師が選定されている
  - 支援センターを対象とした研修会を実施する
  - 研修会に8割以上の支援センターが参加している
  - 研修会を欠席した出席者に対して個別フォローを行っている
- 自治体職員が本事業の意義を問いながら事業に取り組むことができるための活動について。
  - 自治体職員に本事業の意義を伝えるための基礎資料が収集されている
  - 自治体職員に本事業の意義を伝えるための教材が作成されている
  - 自治体職員に本事業の意義を伝えるために適切な講師が選定されている
  - 自治体職員を対象とした研修会を実施する
  - 研修会に8割以上の自治体職員が参加している
  - 研修会を欠席した出席者に対して個別フォローを行っている



# 2022年度の ロジックモデル（目標）と達成度

アンケート（p.45）の回答を集計し、ロジックモデル（目標）に対する達成度を算出し、表にしました。表の見方は以下の通りです。この集計により、予想以上に成果があった点、課題を残した点を「見える化」しました。

表の見方

- 事業当初に作成した「ロジックモデル（目標）」に対し、アンケートをもとに集計しています。
- アンケートの設問が5段階のものは5.0を最高値にし、平均値を算出。チェックリストで回答したものについては、項目中の選択数に応じて算出。

■ 目標を達成

アウトカム	ロジックモデル（目標）	アンケート	アンケート対象	評価尺度	達成目標	支援センター (n=7)	自治体 (n=6)	広域センター (n=1)
最終 アウトカム	各支援センターが協働し、相互フォローしながら、「みんなで考える」体制づくりを目指す	Q1	支援センター／自治体	5段階評価	3.5	3.71	3.67	
		Q2	支援センター／自治体	5段階評価	4.0	4.14	4.50	
中間 アウトカム	支援センターが自治体職員と、専門性を活かしながらコミュニケーションの幅を広げることができるようになる	Q3	支援センター	5段階評価	4.5	4.29		
	自治体職員が支援センターと、専門性を活かしながらコミュニケーションの幅を広げることができるようになる	Q4	自治体	5段階評価	3.5		4.50	
	支援センターにとって考える引き出しが増えるようになる	Q5	支援センター	5段階評価	4.0	4.36		
	支援センター・自治体同士で相談がし合える関係になる	Q6	支援センター／自治体	5段階評価	4.0	4.00	4.17	
初期 アウトカム2	支援センター・自治体が学び合う場が生まれる	Q7	支援センター／自治体	チェックがついた項目の数に応じた配点	4.0	3.86	3.33	
	支援センター・自治体担当者同士のネットワークが強化される	Q8	支援センター／自治体		4.0	4.43	2.50	
初期 アウトカム1	支援センターや関連自治体の職員同士の対話の場が生まれる	Q9	広域センター	4.0				2.00
	支援センターが主体的に関わる場が生まれる	Q10	広域センター	4.0				4.00
	支援センターが障害者芸術の現場を支援するうえでの基礎知識を得る	Q11	広域センター	4.0				5.00
	自治体職員が本事業の意義を問いながら事業に取り組むことができる	Q12	広域センター	4.0				4.00

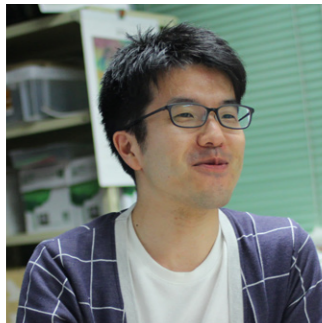
※アウトカム……活動を行うことにより達成が期待される成果

## 自由記述の回答から

アンケート（p.45）のQ1～Q8にて、自由記述欄に記載された内容を一部抜粋して紹介します。

- Q1 ● 県内の障がい者の芸術文化活動に関する実態を把握できていないことが課題でした。今年度、県内の障害福祉サービス事業所と文化施設等に対して調査を行い、その調査結果を基に県内の障がい者の芸術文化活動を行っている事業所等の情報を掲載されたリーフレットを作成し配布する予定です。（自治体）  
● 様々なセンターや取り組み先の見学調査をしたかったがコロナ禍もあり難しかった。同じく県内の作家調査もあまり進まなかった。（支援センター）
- Q2 ● 自治体だけでは障害者アートの支援や推進は難しいと感じています。支援センターでは各種イベントの開催だけでなく、障害者アートの利活用など、自治体では進められない事業をサポートしていただける存在だと感じます。（自治体）  
● 実際にこちらから相談を行った機会がなかったため「どちらでもない」というのが回答の理由になりますが、合同展や会議を通じて各支援センターさんの取り組みには参考にしたいことも多く、今後は自身のセンターだけで終わらずにアドバイスなども求めていきたいと考えます。（支援センター）
- Q3 ● 公共施設や政府・行政機関などの、行政にしかリーチが難しい範囲に向けて本事業の意義や価値の宣伝が効果的になされており、必要とあらば事前に支援センターの協力や、活動内容の相談がし合える関係が構築されていると感じる。（支援センター）  
● 自治体からの相談が少なかったため「どちらでもない」というのが回答の理由になります。しかし相談があった自治体の作品展の実施では、実施に向けての方法や展示の方法や作品の取り扱いなど助言など行いました。（支援センター）
- Q4 ● 障害のある方がどんな想いを込めて芸術文化活動に取り組んでいるのか、支援センターの皆さんから教えていただくことが多く、日々の業務においても大変参考になっております。（自治体）  
● 支援センターのネットワークを活かして県の芸術文化イベントへの出演者を募ることができたりするなど、普及支援事業以外の場においても支援センターとのコミュニケーションが重要なものとなっている。（自治体）
- Q5 ● 展示会の運営方法。コンセプトの立て方。他県との違いを知り改善点を考えることが出来た。（支援センター）  
● ブロック会議では、他県センターの成り立ちが分かり、センターの成り立ちや母体を知ることで立場の違い等から、考え方が少しずつ違ってくるのが分かり、私達の常識が非常識の場合もある、というような新鮮さがあった。（支援センター）
- Q6 ● 県境にお住まいの方から相談を受けた際、隣接する自治体の支援センターにご相談し、アドバイスにより解決の糸口を見出すことが出来た。（支援センター）  
● 定期的にブロック会議や研修会があり、顔を合わせているため他の自治体の担当者に相談しやすい環境にあると感じます。（自治体）
- Q7 ● 他自治体の具体的な活動内容を知ることができる機会はなかなかないため、自治体職員として、各自治体の事例紹介や意見交換会を行う機会を設けていただくことは非常に勉強になった。（自治体）  
● ブロック会議は各支援センターの取組み状況や、現状の課題など、ざっくりと情報交換できる時間がもっと持てるとよかった。後半の研修は、どうしても事業と重なることが多く、参加が難しかった。毎月の日程調整はやや負担が大きかった。（支援センター）  
● 合同企画展参加から得たものは多くあったが、広域の事業としては「マストの目的」ではないのではないかと感じた。もっと支援センター同士の交流の機会が欲しかった。（コロナ状況下でなかなか難しいとは思いますが…）（支援センター）
- Q8 ● 合同企画展において、福祉事業所のスタッフより経験の場として展示作業に参加したいという相談がありました。現在は支援センター同士のネットワークが主ですが、ネットワーク会議や展示会等の作業参加もオープンにする機会ももうけ、県をまたいだ福祉事業所同士が知り合う機会なども作っていただけるといいのではないかと感じます。（支援センター）  
● 今は Zoom 会議が主流で直接会える機会が少ないので、合同企画展のように一堂に会える機会はとても重要だと感じます。（自治体）

## 評価チームによるコメント



### 長津結一郎

ながつ・ゆういちろう

多様な関係性が生まれる芸術の場に伴走／伴奏する研究者。専門はアーツ・マネジメント、文化政策。障害のある人などの多様な背景を持つ人々の表現活動に着目した研究を行っているほか、音楽実技やワークショップに関する教育、演劇・ダンス分野のマネジメントやプロデュースにも関わる。現在、九州大学大学院芸術工学研究院准教授。2013年東京藝術大学大学院博士後期課程修了、博士（学術・東京藝術大学）。著書に「舞台の上の障害者：境界から生まれる表現」（単著、九州大学出版会、2018年）、「アートマネジメントと社会包摂」（共編著、水曜社、2021年）など。日本文化政策学会理事、文化経済学会〈日本〉理事、日本アートマネジメント学会運営委員。

「去年立てたこの目標は、そもそもうちのセンターでやるべきことじゃなかったのかもしれないね」。これは今年度のはじめのほうの会議で話題にあがった内容だ。昨年度は初めての評価検証ということで、広域センターを運営するスタッフ一人ひとりが広域センターに何を求め、各都県の支援センターや自治体との関わりにおいて何を生み出したいかを言語化するところから始めた。私がお手伝いしたのは、「こうなったらいいな」といういわば絵に描いた餅を形にし、それを年度末にもう一度ひっぱりだして、「で、どうでした？」と振り返ることをお手伝いすることにあつた。冒頭の発言は、1年間評価検証をやってみたあとに、今年度の事業計画について話し合うなかで出てきた言葉だったように記憶している。評価のサイクルが回り、事業改善につながったと思えた瞬間だった。

昨年度の報告書にも書いたが、私の関わりは、専門家として外部評価を行うことではなく、自分たちの活動の価値を言葉にし、それをもとに自分たちオリジナルの評価のあり方を開発する場を促

進（ファシリテーション）することにある。その意味で私自身が興味深かったのは、評価を行うこと自体が、広域センターのスタッフにとって、このセンターがいったい何をすべき組織なのかということ深く認識する手がかりになっていることだ。

今年度の評価結果に基づくと広域センターの今年度の事業は、支援センター同士のネットワークや協力関係、相互フォロー体制については引き続き充実していたようだ。一方、支援センターや自治体の学び合い、ネットワークの構築にはまだ課題が残されている。ブロック会議、研修会、合同企画展などの個々のプログラムが、支援センターが学びたい、知りたいと思える内容になっているかは今一度、吟味が必要だ。ただ、困ったときに相談しあえる関係性が構築できているというのは大きな強みだろう。今後はそのネットワークを活かしつつ、個々の支援センターと頼り合いながら、支援センターや自治体の活動がより良くなる伴走支援を行っていくことが広域センターに求められるだろう。



### 藤原顕太

ふじわら・けんた

舞台芸術制作者、社会福祉士。日本社会事業大学卒業後に舞台芸術界に入り、舞台芸術制作者に向けた中間支援の仕事に就く。2017年より福祉と芸術に関わる仕事を始め、障害のある人の芸術活動支援に携わる。2021年、アートマネージャーによるコレクティブ「一般社団法人ベンチ」を設立し、理事に就任。埼玉県東松山市の高齢者福祉施設にアーティストが滞在するプロジェクト「クロスブレイ東松山」や、アクセシビリティ・コーディネートなどの事業を行っている。NPO法人Explat副理事長。

南関東・甲信ブロックでは令和4年度に長野県に支援センターが新設された。新進のセンターが存在する一方、豊富な実績を持つセンターも複数存在するブロックである。地域特性、設立母体、得意とする領域、事業予算・規模など前提となるものがセンターにより異なる中、広域センターでは令和3年度より「各支援センターが協働して相互にフォローしながら、ともに考えることのできる環境づくり」を目指してきた。

国や自治体から支援センターに求められているミッションは幾つもあるが、その内容を具体的な事業・サービスに落とし込む際には、画一化ではなく、地域特性に合わせた創造的な方法によって表現されるべきものである。同時に、その内容が独善的にならず、内外からの多様な声に耳を傾け、社会的責務を担う存在として価値観・あり方を更新し続けていくことも重要だ。一方、求められることの大きさに対して、支援センターは人手不足が課題となりやすい。疲弊せず、持続可能な活動

をしていくためには、センターへのエンパワメントは欠かすことができない。支援センター同士での主体的な対話と学び合いこそが、持続的なエンパワメントと価値観の更新に資するものと捉え、広域センターでは取り組みを続けてきた。

前年度からの発展を図った点として、合同企画展において、各センターがより参加しやすいフォーマットを作り「支援する側」に焦点をあてたことが挙げられるだろう。また研修では、特に中間支援の役割と意義に着目した研修を実施したことを取り上げたい。中間支援という概念は一つの文化でもあり、本質的に定着していくには相応の時間を要するが、そのあり方について考え続けていくことが、センターの社会的役割を更新していくことにもつながると考える。

今後さらに対話を重ねて「変わり続けることのできる」ブロックを目指し、これからも挑戦を続けてほしい。

## おわりに

昨年度に引き続き、「南関東・甲信障害者アートサポートセンター」として当法人が担わせていただき2年目を終えました。

今年度は新たに長野県に支援センターが開設し、これで当ブロックにはすべての都県に支援センターが設置されました。長野県では2016年より「ザワメキアート」展が開催され、その知見を活かした事業を展開しています。丁寧な取材をもとにした展覧会運営や、児童・生徒を対象としたプロジェクト等の特徴的なアプローチは、当ブロックの盛り上げりに新たな風を運びました。

心強い仲間を迎え、昨年度に引き続き広域センターとして「みんなで考える」をキーワードに、それぞれの支援センターが持つ強みから学び合い、それぞれの支援センターが持つ強みから学び合い、困ったときには助け合えるネットワークの拡充を目指し、事業を展開してきました。結果として、1年間に計4回の会議と3本の研修会、そして合同企画展の開催といった密度の高い内容となり、本書では、その中心的な事業をご紹介します。

なかでも、合同企画展ではそれぞれの支援センターがどのように障害のある人たちやその支援者に寄り添い、事業を広げているのかを再確認する

ことができました。表現に多様性があるように、その寄り添い方もまた同じく多様です。支援者もその違いを認め合い、手をつなぐことでこの事業のさらなる広がりが見えてくるのではないかと考えています。

障害のある方たちの表現を支援するという点において、ゴールや正解はありません。試行錯誤と考察を重ねながら、ともに歩んでくれる支援センターの存在が、障害のある人たちをはじめ、その家族や支援組織にとっての希望となり、新たな表現を生み出す契機につながっていくのだと思います。そのためにも広域センターとして、それぞれの地域で何が求められているのかを今一度吟味しながら、各地域でのより良い活動に向けて事業の振り返りを大切にしていきます。

今後も社会情勢にかかわらず、各支援センターとともに歩み、障害のある人たちがその個性を十分に発揮して豊かに生きられる多様な社会の創出を目指し、真摯に活動を続けていきたいと思っております。最後になりますが、本事業の実施にあたりご支援ご協力を賜りましたみなさまへ、心より感謝申し上げます。

南関東・甲信障害者アートサポートセンター

## Each Center

### 南関東・甲信ブロック 支援センター一覧

#### 埼玉県・基幹型

#### 埼玉県障害者芸術文化活動支援センター アートセンター集

実施団体 社会福祉法人みぬま福祉会 所在地 〒333-0831 埼玉県川口市木曾呂1445 工房集内  
TEL 048-290-7355 FAX 048-290-7356 E-mail artcenter@kobo-syu.com  
URL https://artcenter-syu.com/



#### 埼玉県・特色型

#### ART(s)さいほく

実施団体 社会福祉法人昂 所在地 〒355-0077 埼玉県東松山市上唐子1532-5 まちこうばGROOVIN' 内  
TEL FAX 0493-81-4597 E-mail arts\_saihoku@subaru-swc.com  
URL https://www.subaru-swc.com/~groovin/



#### 千葉県

#### 千葉アール・ブリュットセンター うみのもり

実施団体 株式会社いろだま 所在地 〒299-4301 千葉県長生郡一宮町一宮2553-8  
TEL FAX 0475-36-7411 E-mail info@uminomori.net  
URL https://uminomori.net/



#### 東京都

#### 東京アートサポートセンターRights (ライツ)

実施団体 社会福祉法人愛成会 所在地 〒164-0002 東京都中野区上高田3-38-5 太和屋産業ビル2階  
TEL 03-5942-7251 FAX 03-5942-7252 E-mail rights@aisei.or.jp  
URL https://rights-tokyo.com/



#### 神奈川県

#### 神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター

実施団体 認定NPO法人S T スポット横浜 所在地 〒220-0004 神奈川県横浜市西区北幸1-11-15 横浜STビル地下1階  
TEL 045-325-0410 FAX 045-325-0414 E-mail info@k-welfare.org  
URL https://k-welfare.org/



#### 山梨県

#### YAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンター

実施団体 社会福祉法人ハヶ岳名水会 所在地 〒408-0025 山梨県北杜市長坂町長坂下条1237-3  
TEL 0551-45-7027 FAX 0551-32-6351 E-mail yan@y-meisui.or.jp  
URL http://y-meisui.or.jp/yan/



#### 長野県

#### ザワメキサポートセンター (長野県障がい者芸術文化活動支援センター)

実施団体 社会福祉法人長野県社会福祉事業団 所在地 〒381-0034 長野県長野市大字高田364-1 (長野県社会福祉事業団 本部事務局内)  
TEL 026-217-0022 FAX 026-228-0310 E-mail art@nagano-swc.com  
URL https://nagano-swc.com/



表紙絵＝野口敏久（工房集）  
扉絵・似顔絵＝関 翔平（工房集）

# ART SUPPORT CENTER

南関東・甲信  
障害者アートサポートセンター  
2022 年度事業報告書



2023 年 3 月 31 日発行

企画・発行 社会福祉法人みぬま福祉会  
南関東・甲信障害者アートサポートセンター  
〒333-0831 埼玉県川口市木曾呂 1445（工房集内）  
Tel: 048-290-7355 / E-mail: artcenter@kobo-syu.com

編集 工房集  
制作 佐藤恵美  
執筆協力 坂本のどか (p.26-p.33)  
デザイン 宮外麻周 [m-nina]  
センターロゴデザイン PORT  
撮影 今井紀彰、鈴木広一郎、長崎剛志、工房集

助成 令和 4 年度障害者芸術文化活動普及支援事業（厚生労働省）

© 社会福祉法人みぬま福祉会  
無断転載・複写を禁じます。

南関東・甲信障害者アートサポートセンター  
<https://skk-support.com>

南関東・甲信  
障害者アート  
サポートセンター



社会福祉法人  
みぬま福祉会

